博　多　43

－博多遺跡群第81次発掘調査報告書－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第392集

1 9 9 5

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

福岡市は地理的に中国大陸や韓半島に近く、古くより大陸文化の交流の場としての役割を果してきました。市内には、大陸との交渉を物語る数々の遺跡・遺物が残されています。とりわけ、都心部にある博多遺跡群は、その交流を示す、日本を代表する貿易国際都市「博多」の遺跡です。

博多地区は近年、再開発が急速に進み、開発に伴う緊急発掘調査も100件を越えようとしています。本書はその第81次調査の報告書であります。この調査地点は「博多浜」と呼ばれた砂丘上に立地しており、調査では、弥生時代から江戸時代までの2000年間におよぶ遺構・遺物を発見することができました。なかでも、古代の越州窯産青磁器・緑釉陶器・古代瓦・須恵器・土師器の出土は、これまで所在地の明らかでない、鴻臚中島館の位置を知る重要な手懸かりになるものと考えられます。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料として学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまで御指導・御協力いただいた関係各位の皆様に感謝申し上げます。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　尾　花　　剛

例　言

1．本書は博多区冷泉町における事務所兼個人専用住宅建設に伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成5年7月1日～8月19日の期間に発掘調査を実施した博多遺跡群第81次調査の報告書である。
2．発掘調査は文化財部埋蔵文化財課の山崎純男・山口譲治・菅波正人が担当した。
3．本書に使用した遺構の実測は山崎・菅波が行なった。
4．遺物の実測は山崎が行なった。
5．遺構・遺物の製図は山崎が担当した。
6．写真撮影は遺構を山崎・菅波が、遺物を松村道博が行なった。
7．本書の作成には久賀登世子・藤アイ子・成清直子・矢川みどり・村田悦子・三栗野明美の協力を得た。
8．本書では遺構略号を遺構番号の頭に付した。遺構の略号はSE（井戸）SK（土坑）SD（溝）SX（その他）である。
9．本書にかかわる図面・写真・遺物などの一切の資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
10．本書の執筆・編集は山崎が行なった。

遺跡調査番号	9323		遺跡略号	HKT	
地番	冷泉町237－1		分布地図番号	天神　49	
開発面積	137㎡	調査対象面積	137㎡	調査面積	137㎡
調査期間	930701～930819				

本　文　目　次

第１章　調査に至る経過と調査体制 …… 2
　１．発掘調査に至る経過 …… 2
　２．発掘調査の体制 …… 2
第２章　調査の記録 …… 3
　１．調査区の層序 …… 3
　２．各遺構検出面の概要 …… 9
　３．弥生・古墳時代の遺構と遺物 …… 11
　４．古代の遺構と遺物 …… 11
　５．第３面検出遺構と出土遺物 …… 16
　６．その他の出土遺物 …… 29
第３章　おわりに …… 29

挿　図　目　次

Fig.１　発掘調査風景 …… 3
Fig.２　博多遺跡群と調査区の位置 …… 4
Fig.３　発掘調査区の層序 …… 5
Fig.４　各検出面遺構平面分布図 …… 6
Fig.５　発掘調査区土層断面　①南壁　②東壁上半部　③東壁下半部 …… 7
Fig.６　発掘調査区の遺構と遺物出土状況
　①甕棺墓　②SK－13 ③SK－15 …… 8
Fig.７　基壇状石垣実測図 …… 9
Fig.８　弥生土器・土師器実測図Ⅰ …… 10
Fig.９　弥生土器・土師器実測図Ⅱ …… 11
Fig.10　甕棺墓・甕棺実測図 …… 12
Fig.11　古代の遺物実測図Ⅰ（須恵器） …… 13
Fig.12　古代の遺物実測図Ⅱ（土師器・その他） …… 14
Fig.13　古代の遺物実測図Ⅲ（新羅陶器・焼塩壺） …… 15
Fig.14　古代の遺物実測図Ⅳ（瓦） …… 16
Fig.15　SK－12出土遺物実測図 …… 17
Fig.16　SK－12・SK－13出土遺物実測図 …… 18
Fig.17　SK－13出土遺物実測図（土師器） …… 19
Fig.18　SK－13・14実測図 …… 20
Fig.19　SK－15出土遺物実測図 …… 21
Fig.20　SK－16・SK－17出土遺物実測図 …… 22
Fig.21　SK－18出土遺物実測図Ⅰ …… 23
Fig.22　SK－18出土遺物実測図Ⅱ …… 24
Fig.23　SK－18出土遺物実測図Ⅲ …… 25
Fig.24　SK－19出土遺物実測図 …… 26
Fig.25　遺構外出土遺物実測図Ⅰ …… 27
Fig.26　遺構外出土遺物実測図Ⅱ …… 28

第1章　調査に至る経過と調査体制

1．発掘調査に至る経過

博多の鎮守、櫛田神社の東側、福岡市博多区冷泉町237－1の一角に、岩吉齋氏によって自家用事務所兼自宅ビルの計画がもちあがり、平成5年4月8日に福岡市教育委員会埋蔵文化財課に事前審査願が提出された。同地区は博多遺跡群の中心地域として周知されている場所で、弥生～室町時代までの遺構の存在が予想された。よって、教育委員会埋蔵文化財課では同年4月27日試掘調査を実施した。この結果、同地には古代から江戸時代までの遺構・遺物が良好な状態で存在していることを確認した。埋蔵文化財課では遺跡の保存を考慮し、設計変更を含めて協議を重ねたが、敷地が137㎡と狭く、また、自宅兼用であるため現状保存が不可能で、かつ、記録保存のための調査も急を要した。

おりしも、最近の緊急調査の急増により、係員は各現場で発掘調査にあたっており、人的余裕がないまま、発掘調査を実施することとなった。調査は平成5年（1993）7月1日に着手し、8月19日に終了した。なお、調査費について一部原因者負担をお願いした。

2．発掘調査の体制

緊急を要した調査で、充分な調査体制を組めないまま調査を実施し、また、連日の雨天により発掘調査の進行には大きな困難をきわめたが、諸氏のあたたかい御支援と御協力により無事調査を終了することができた。調査体制は以下のとおりである。

調査地及び面積　福岡市博多区冷泉町237番地1・137㎡
調査年月日　平成5年（1993）7月1日～8月19日
調 査 委 託　岩吉　齋
調 査 主 体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
調 査 総 括　課長　折尾　学　第2係長　山崎純男
調 査 庶 務　埋蔵文化財1係　中山昭則（前任）・内野保基・入江幸男・
　　吉田麻由美（前任）・西田結香
事 前 審 査　主任文化財主事　山口譲治　文化財主事　菅波正人
調 査 担 当　山崎純男・山口譲治・菅波正人
調査作業員　古屋俊英・岡　毅・川田洋嗣・田中大介・本田浩次郎・東　真一・
　　大西史彦・宮下　衛・久賀登世子・津川真千代・岩隈史郎・権藤利雄・
　　篠崎伝三郎・関　義種・萩尾行雄・藤田圭三・木村久利・梅木繁良・
　　鹿毛賢次郎・鹿毛周一・藤アイ子・成清直子・萬スミヨ・前田京子・
　　宮本佐和子・仲田博之

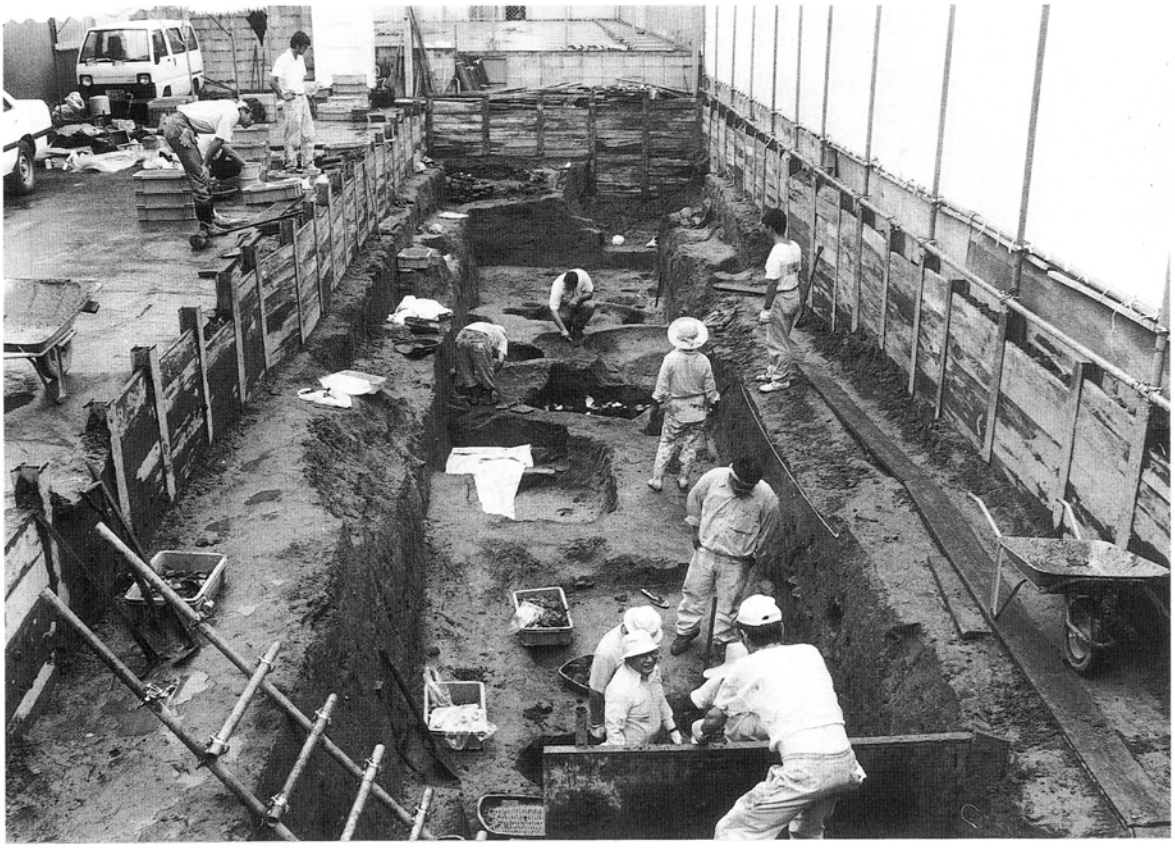


Fig. 1　発掘調査風景

第2章　調査の記録

1．調査地区の層序

調査区の遺物包含層は現地表面から3m近く存在、その堆積は弥生時代から現代におよぶ約2000年間のものである。継続した遺跡の土層関係は、極めて複雑で単純ではない。ここでは、単純化して基本的層位について述べてみることにする。(Fig.3・5)

この遺跡の基盤層は黄灰色粗砂の風成層が地山となっている。その上部には褐色砂層が厚さ20～30cmで堆積する。地山よりやや暗い層で判別が困難であるが、この層には弥生土器から古墳時代の遺物が包含されている。下半には弥生土器が多く、上半に古墳時代遺物が多い傾向にあるが、場所によっては混在する所もある。この層は包含層のみで遺構の存在は極めて希薄である。この層の上部には鉄分の沈着がみられる暗褐色砂層が厚さ30～40cmの厚さで堆積している。下面に遺構が認められるが数は少なく、溝が主体である。時期は奈良・平安時代の古代に比定できる。古代の層の上層には中世層が幾層にもわたって堆積し、厚さは1.5mに達する。この間には整地層や焼土層が介在し、長い歴史を物語っている。各層には下面から掘り込まれた遺構が存在し、深いものは地山層を深く切り込んでいる。生活面を一定させるのは困難である。中世層の上には近世、現代の層が約1mにわたって堆積しているが、本調査区では重機によって除去し、存在しない。

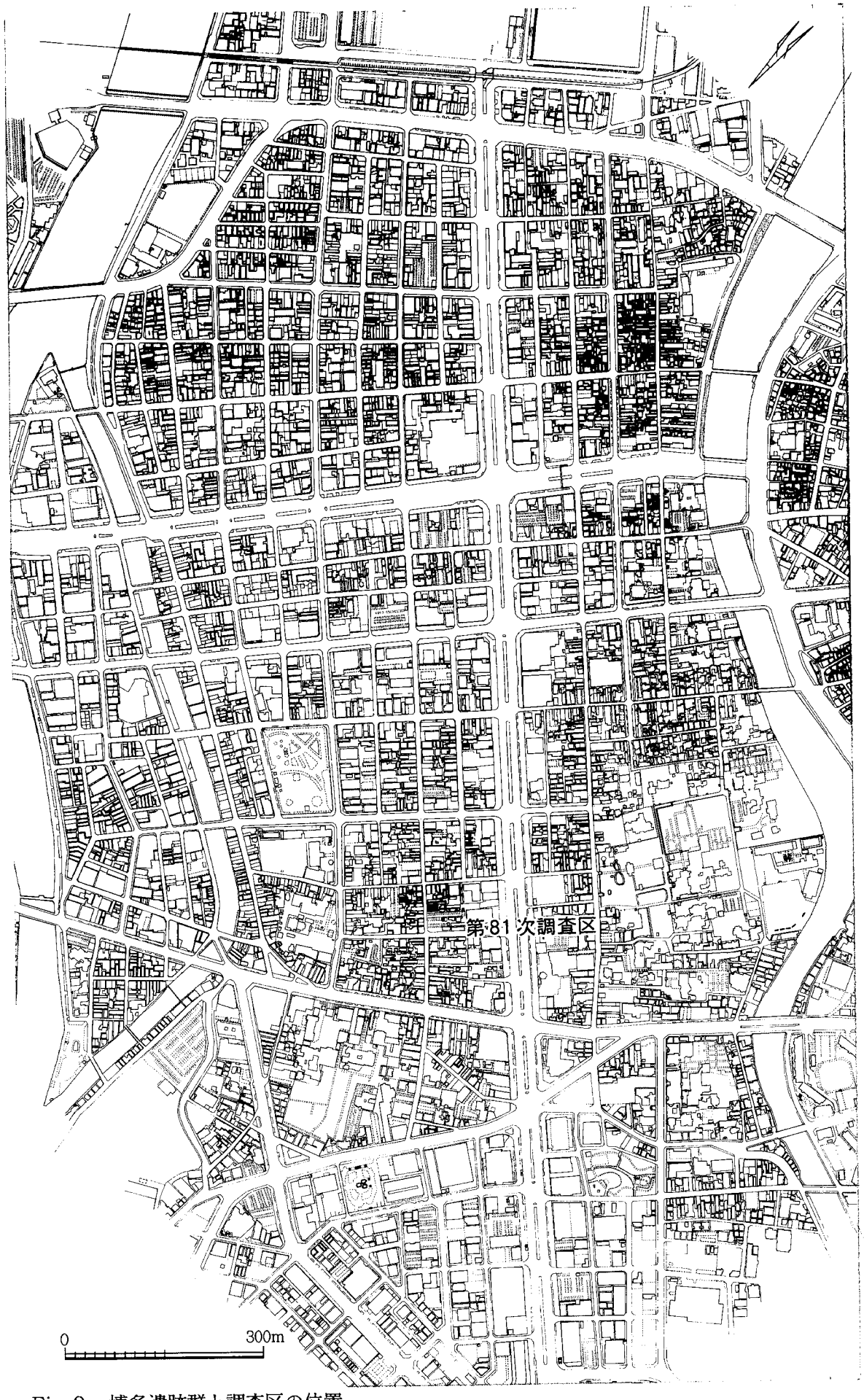


Fig. 2　博多遺跡群と調査区の位置

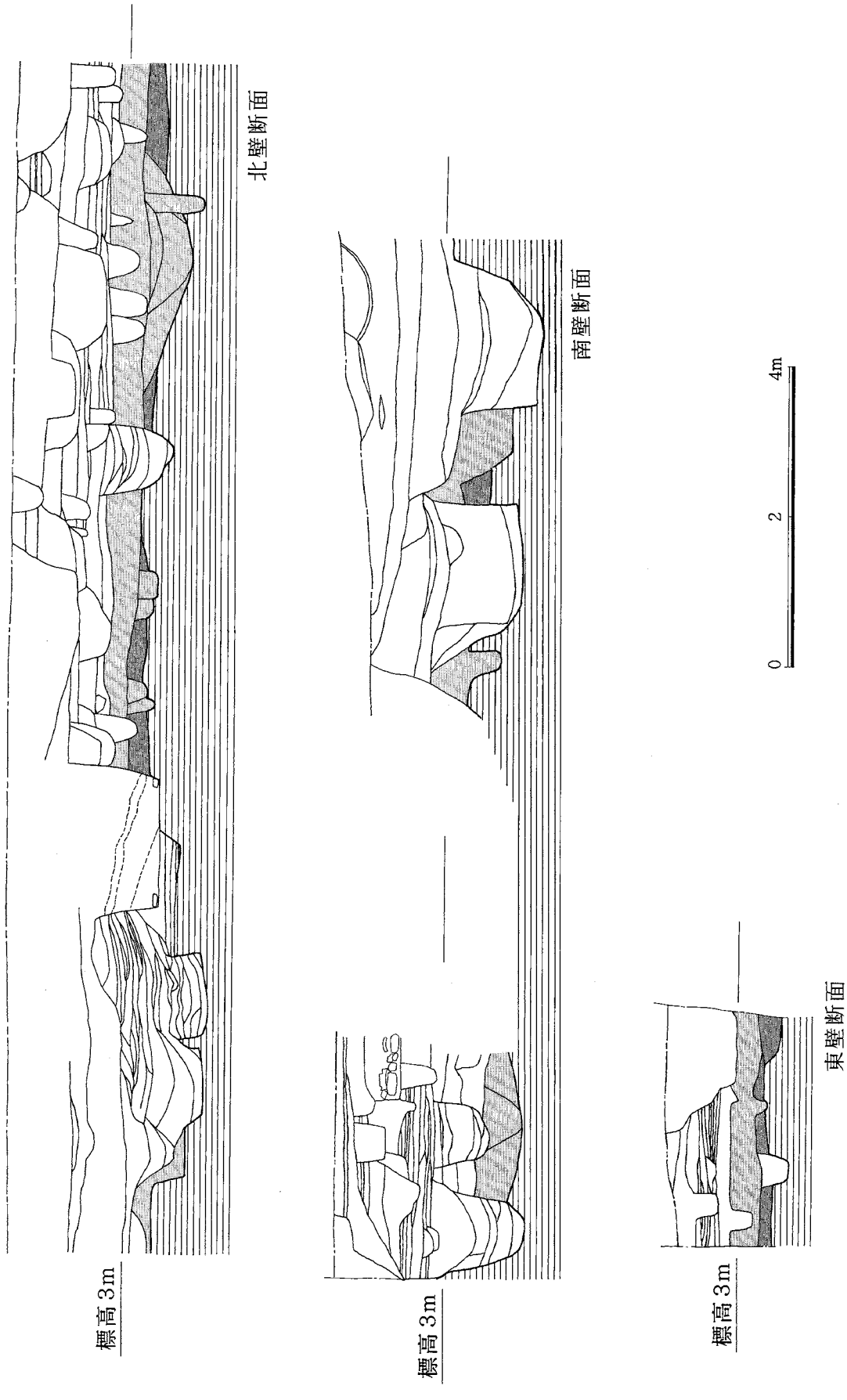


Fig. 3　発掘調査区の層序

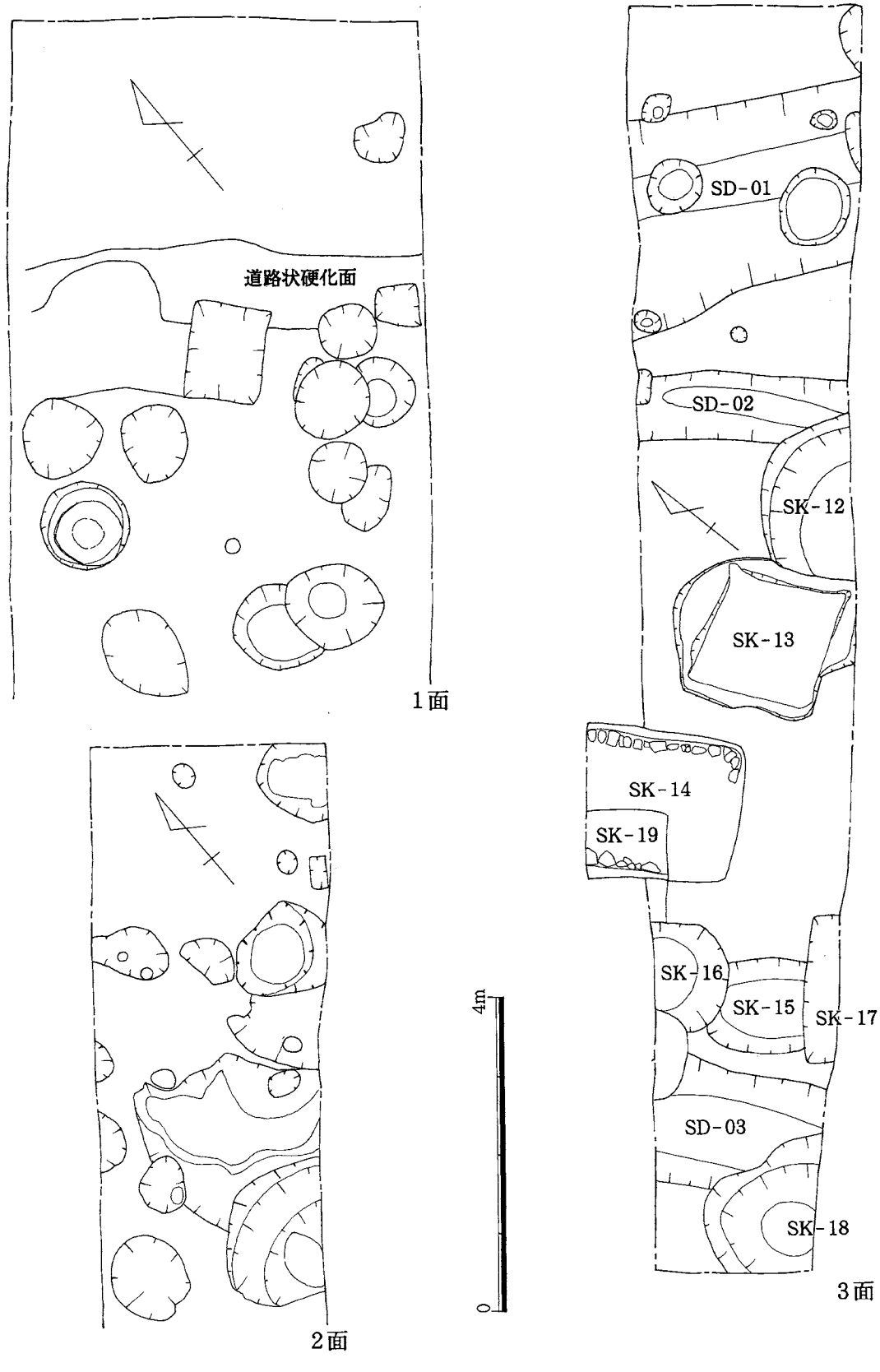


Fig. 4　各検出面遺構平面分布図

①南壁

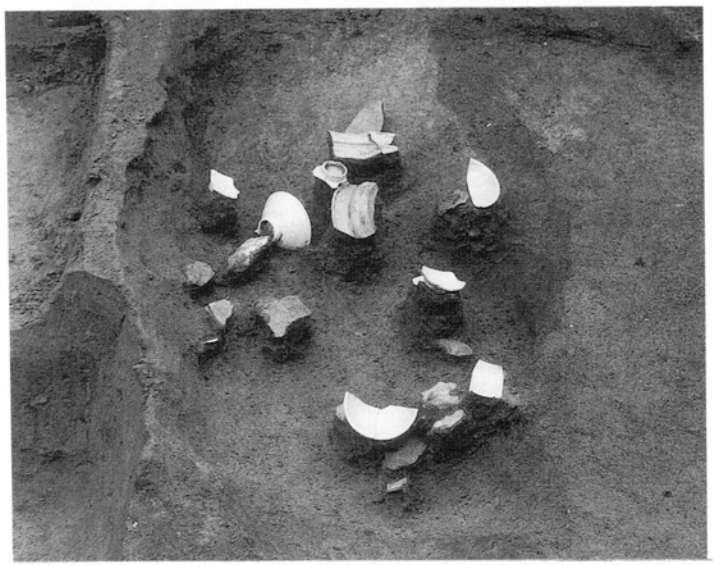
②東壁上半部

③東壁下半部

Fig. 5　発掘調査区土層断面

①甕棺墓

②SK－13



③SK－15

Fig. 6　発掘調査区の遺構と遺物出土状況

2．各遺構検出面の概要

遺構検出は近世面を取り除いた地表下約1mを1面、さらにそれより約1m下面を2面、古代の包含層直上を3面とした認意の面3面で行なった。ただし、1・2面については調査対象区が狭く、排土の処置のために東半部のみにおいて遺構検出を行ない、西半部は近世井戸や近世の瓦溜が大部分を占めていたことや、天候が雨天続きで充分な調査期間の確保が困難であったために断念せざるを得なかった。結果的に調査区の全面の遺構検出を行なったのは3面のみである。以下、各面の遺構分布の概略を述べる。

1面で検出した遺構は時期的には近世初頭～中世末に相当する。遺構はFig.7に示したような建物基壇状の石垣および道路面と考えられる白色砂の硬化面、円形土坑、近世便所と考えられる埋甕がある。ほぼ全面に広がり、その切り合い関係も著しい。遺物の出土量は多いが、その大部分は近世瓦である。基壇状の石垣は調査区北東コーナーに検出したもので、方形のコーナーの一角を検出した。南北長約1.85m、東西長0.9m、高さ45cmを測る。大部分は調査区外にのびる。道路状の硬化面はほぼ北西に延びているが、幅等の正確な数値は以降の遺構によって各所で切られおさえることはできなかった。土坑等の性格は明らかにできない。

2面で検出した遺構は、そのほとんどが土坑である。相互に切り合い関係が著しい。時期的には中世中頃のものが多いが、上層の遺構の存在もみられ、複雑である。

3面の遺構は古代末から中世初頭の遺構が主体である。西半部においては切り合いが著しいが、東半部では切り合いは少ない。遺構は土坑が主体で、出土遺物は中国産の白磁を主体としたもので、時期的にも単純である。遺構の状態も良好で、平面プランは方形状のものが多い。

3面下の古代層の直下においても若干の遺構を検出することができた。古代の遺構は溝三条で、いずれも北西－南東方面に延びる。性格等については調査区が狭すぎ明確にしがたい。溝内からは越州窯青磁器や緑釉陶器も出土しており、後述するように、遺物には優品も多く、官衙的な施設の存在が予想できる。

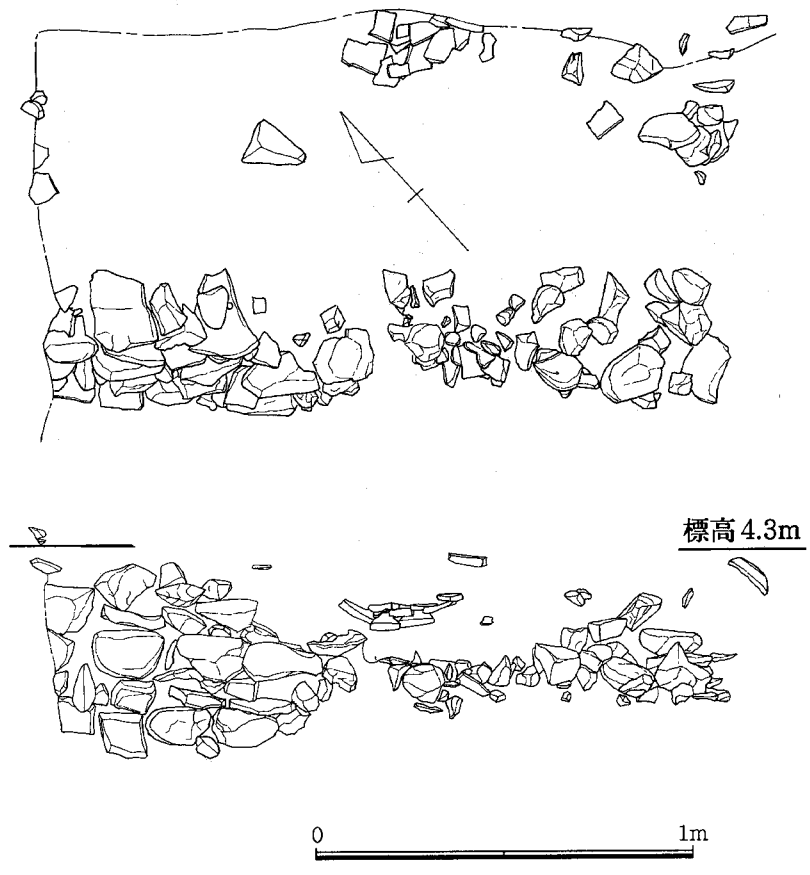


Fig.7　基壇状石垣実測図

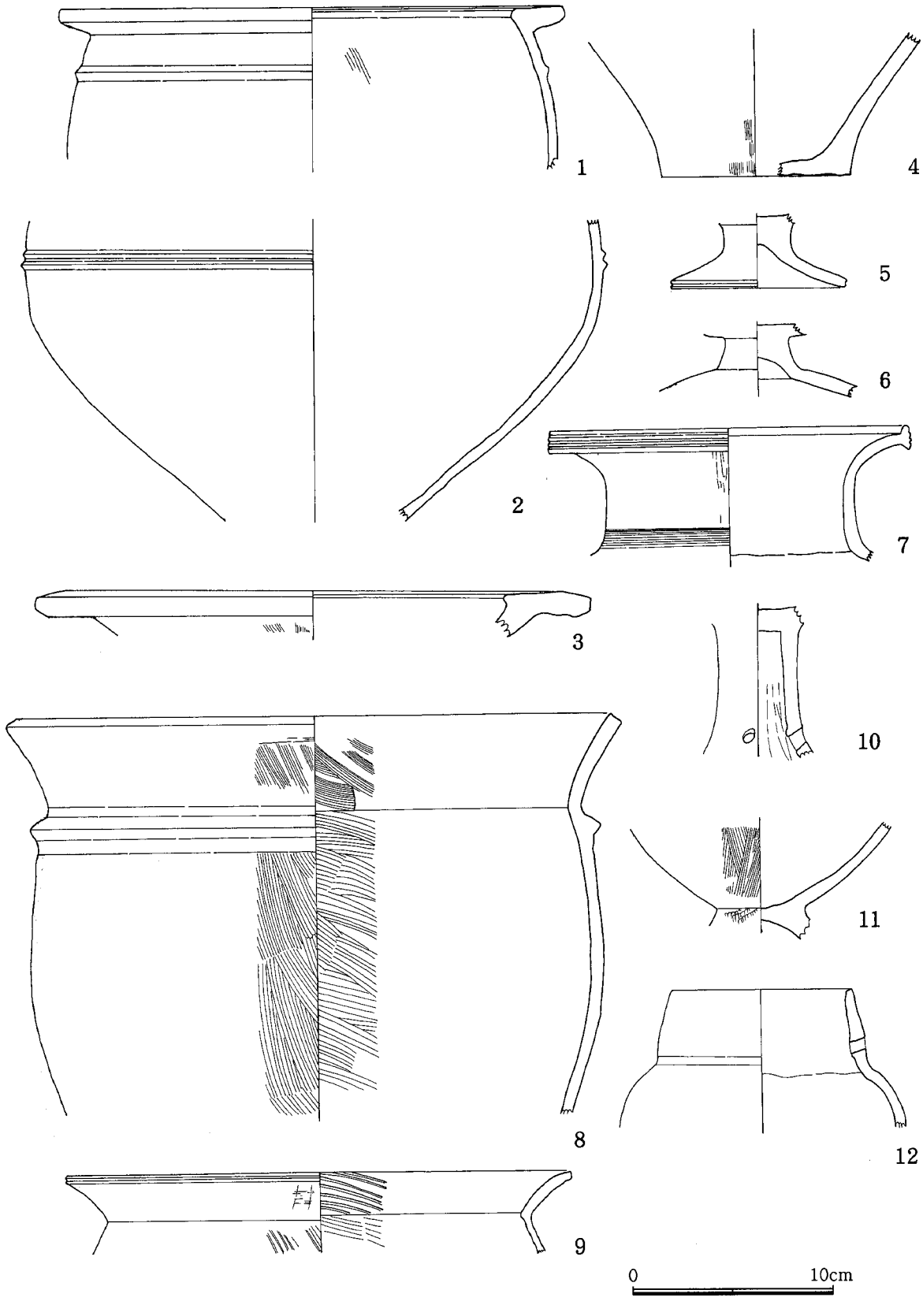


Fig. 8　弥生土器・土師器実測図 I

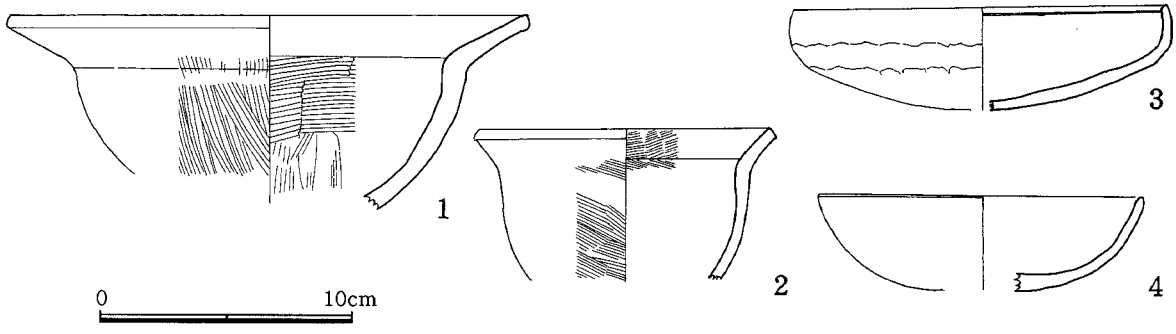


Fig.9　弥生土器・土師器実測図Ⅱ

3．弥生・古墳時代の遺構と遺物

弥生時代・古墳時代の遺物は調査区全面に出土するが、傾向として弥生土器は調査区東半部に顕著である。遺構として明確にし得たのはFig.10－1に示した弥生時代終末期の甕棺墓1基である。甕棺はFig.10－2に示した土器で単棺である。長径90cm、短径70cm、深さ25cmの楕円形の墓壙にほぼ水平に埋置されているが、一部、古代の溝によって切られ破壊されている。甕棺は口縁部が大きく外反し、頸部と胴下半に各1条の断面台形の突帯をめぐらし、突帯には刻目を入れている。内外面共に粗い刷毛目調整を加えている。なお、遺構としては存在しないが、出土した中期に属する弥生土器は、大部分が甕棺の破片と考えられるものである。その他は、丹塗り磨研の祭祀用土器に限られており、周辺に甕棺墓地の存在を予想することができる。

出土遺物の一部をFig.8・9に示した。弥生土器は中期と終末期の二時期にわたって存在し、古墳時代の遺物は須恵器を伴わない段階のものであるが、量は極めて少ない。Fig.8の1・4は甕形土器、1はL字形口縁下に断面三角形の突帯1条をめぐらす。4は底部破片。2は壺形土器の胴下半部。胴中位にM字突帯1条をめぐらしている。1・2・4は小児甕棺として利用された可能性が強い。表面は風化によって調整痕等は明確にしがたい。3は高坏の坏部の口縁部。5・6は台付椀の脚部と考えられる。外面は丹塗り磨研されている。7は壺形土器の頸部から口縁にかけての破片。口縁部はタガ状に短かくたちあがり、外面に浅い沈線3条をめぐらしている。8・9は甕形土器。8は口縁がたちあがり気味にひらき、頸部に断面三角形の突帯1条をめぐらす。胴部はあまり張らない。器面の内外面共に刷毛目調整痕が顕著である。9は口縁部がくの字形に反転し、端部に1条の浅い沈線を施す。10は高坏脚部。脚筒部はやや高く、下半に円形の透し孔が3ヶ所に穿たれる。11は脚付椀。脚端部と椀の口縁を欠いている。12は小型の壺形土器。口縁は内傾しながら直線的にたちあがる。胴は球形をなす。頸部に小さな円孔が穿孔されている。Fig.9－1・2は鉢形土器である。1は口縁が屈曲し、外側に張り出す。器面の内外は刷毛目調整。脚台がつく可能性が強い。2はやや小型品である。口縁はくの字に屈曲し、ゆるやかにたちあがる。3・4は椀形土器。3は口縁がやや内傾し、内側に段がある。外面は粘土の接合痕が顕著に残る。

4．古代の遺構と遺物

古代の遺構は溝3条がある。いずれも調査区に対し、直交する。その概略をみていこう。最も東

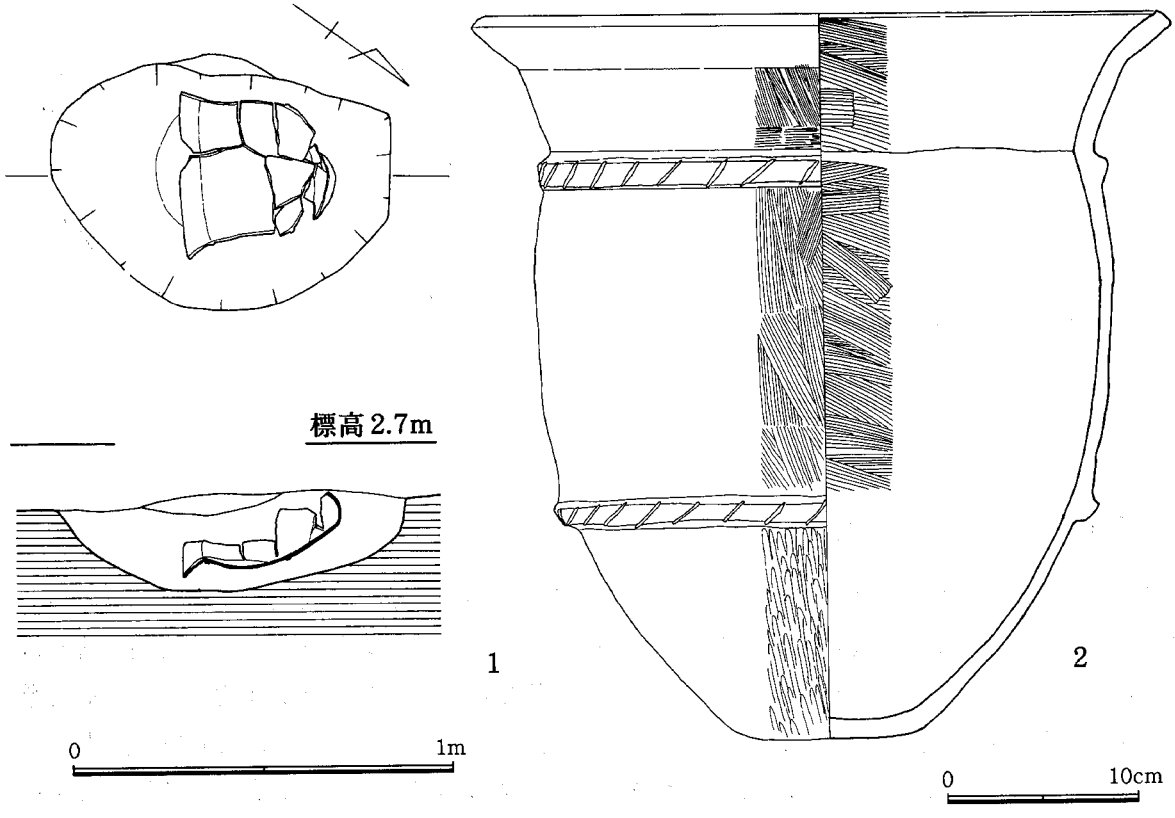


Fig.10　甕棺墓・甕棺実測図

に位置するのは最も規模が大きい。幅2.25～2.6m、長さ2.9m、深さ約60cm、断面形は皿状をしている。弥生時代の甕棺墓を切っている。この溝の中位において水銀が粒状になって出土した。水銀の量は約2cc程度である。文献では水銀も交易品の一つである。希有な遺物で、時期が特定できたことは重要である。溝の主軸方向はN－55°－Wである。この溝の西に約1～1.5mの地点にも古代の溝が平行して走っている。溝幅0.8m、長さ2.65m、深さ40cm、断面形はU字形をしている。埋土中より緑釉陶器等が出土している。北側セクション図では中世遺構に切られて底の一部が判別できるにすぎない。溝の方向はN－36°－Wである。最も西に検出した溝は中央の溝と約7.6m離れている。溝幅1.5m、長さ2.7mと確認した。深さ70cm、断面形は逆台形状をなす。埋土中より多量の須恵器が出土している。以上の3本の溝は部分的で、その利用目的等は明らかにできないが、区画溝の可能性も否定できない。

出土遺物は多量で重要なものが多い。須恵器・土師器・越州窯青磁器・新羅陶器・製塩土器・瓦類・水銀等がある。須恵器（Fig.11、12－1～9）は坏蓋（Fig.11－1～15）盤蓋（16）高台付坏（17～25、27、28）坏（26、29～32）。盤には三種類がある。小型品（33～37）、中型（38）大型品には高台が付く（39、40）高坏は脚部のみがある（Fig.12－1・2）。3は短頸壺の蓋である。4・6は壺、4は口縁部、6は底部である。5は小型の甕である。7は鉢、口縁部が屈曲して外反する。9は長頸壺の胴部破片で、胴中位は尖り、稜線がはいる。8は坏底部破片である。外底部に墨書がある。数字の十と読めるが判然としない。緑釉陶器（Fig.12－10～12）はいずれも底部破片である。10は洛北産、11・12は長門産とみられる。土師器（Fig.12－13～20）には盤（13・16）坏（14・15）は15に高台がつく。甕（17～20）は口縁部がくの字形に外反し、胴内部には

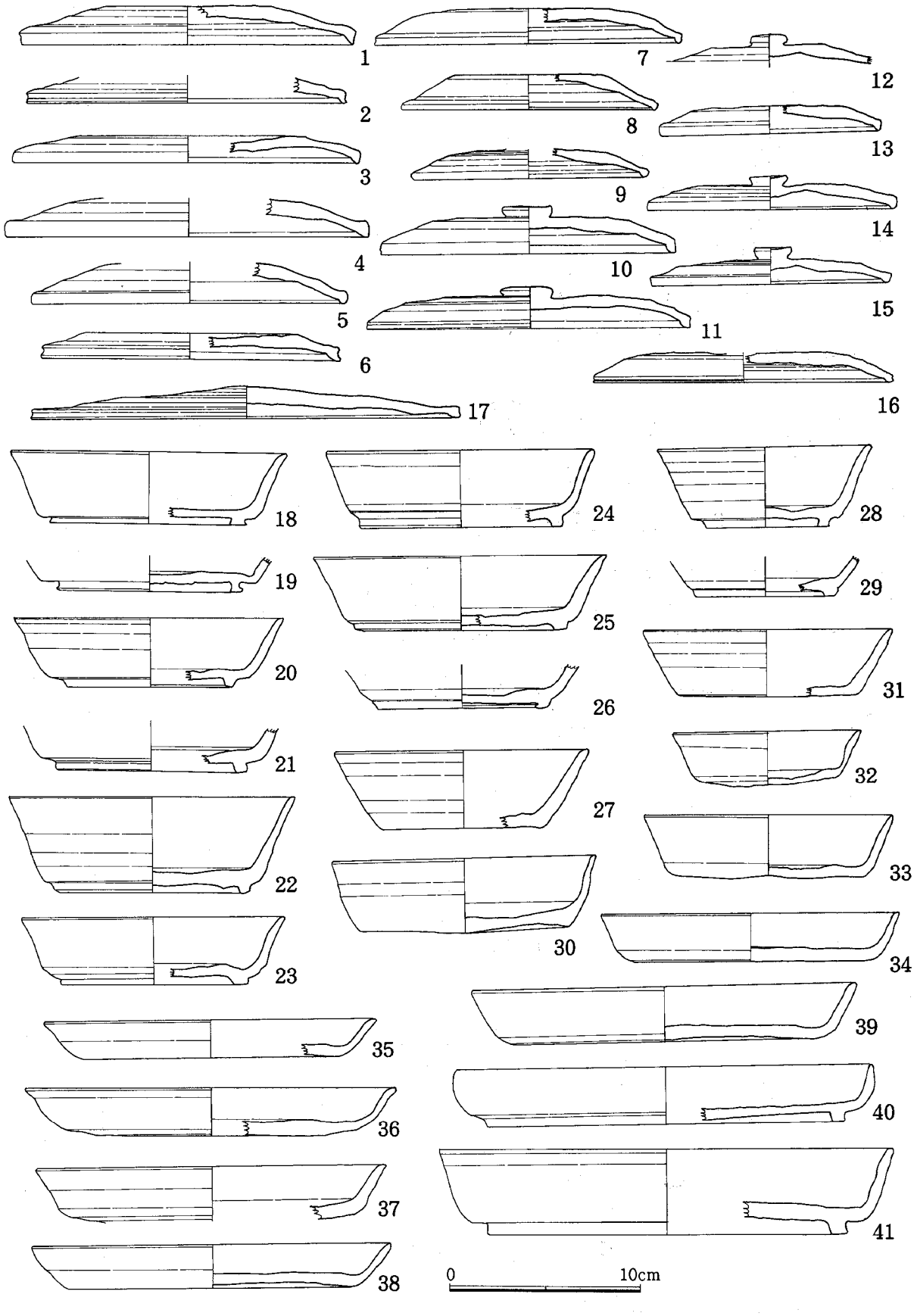


Fig.11　古代の遺物実測図Ⅰ（須恵器）

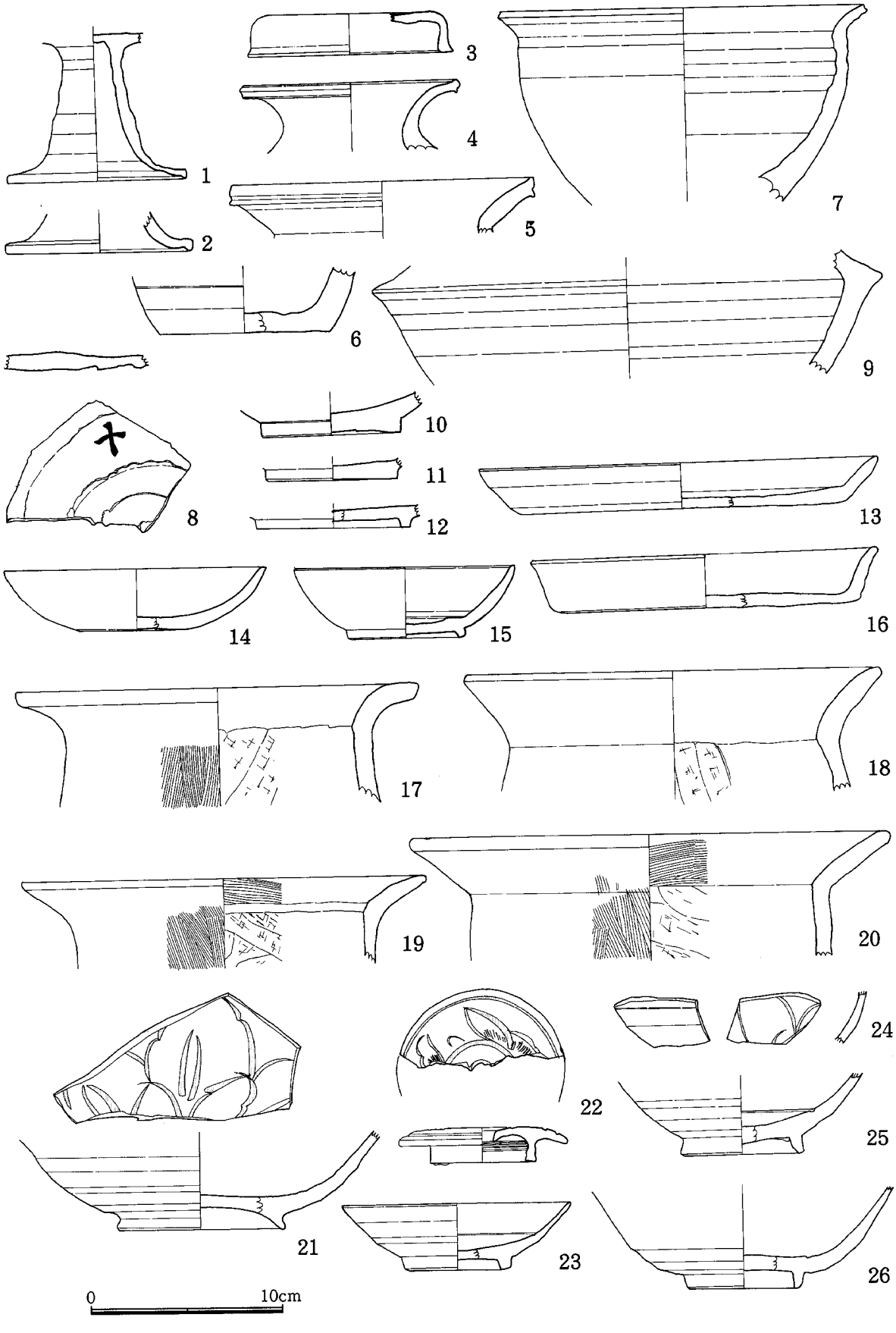


Fig.12　古代の遺物実測図Ⅱ（土師器・その他）

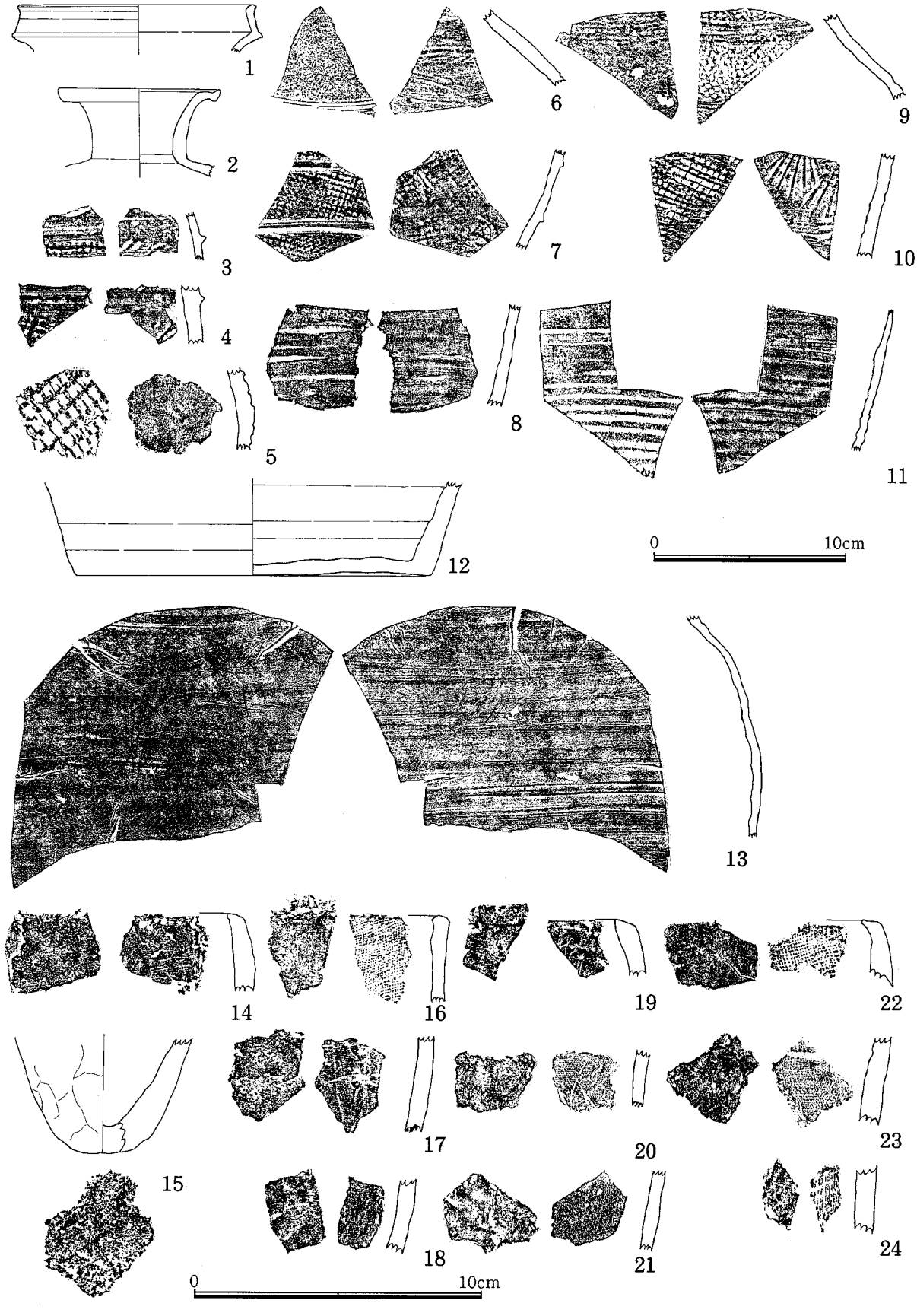


Fig.13　古代の遺物実測図Ⅲ（新羅陶器・焼塩壺）

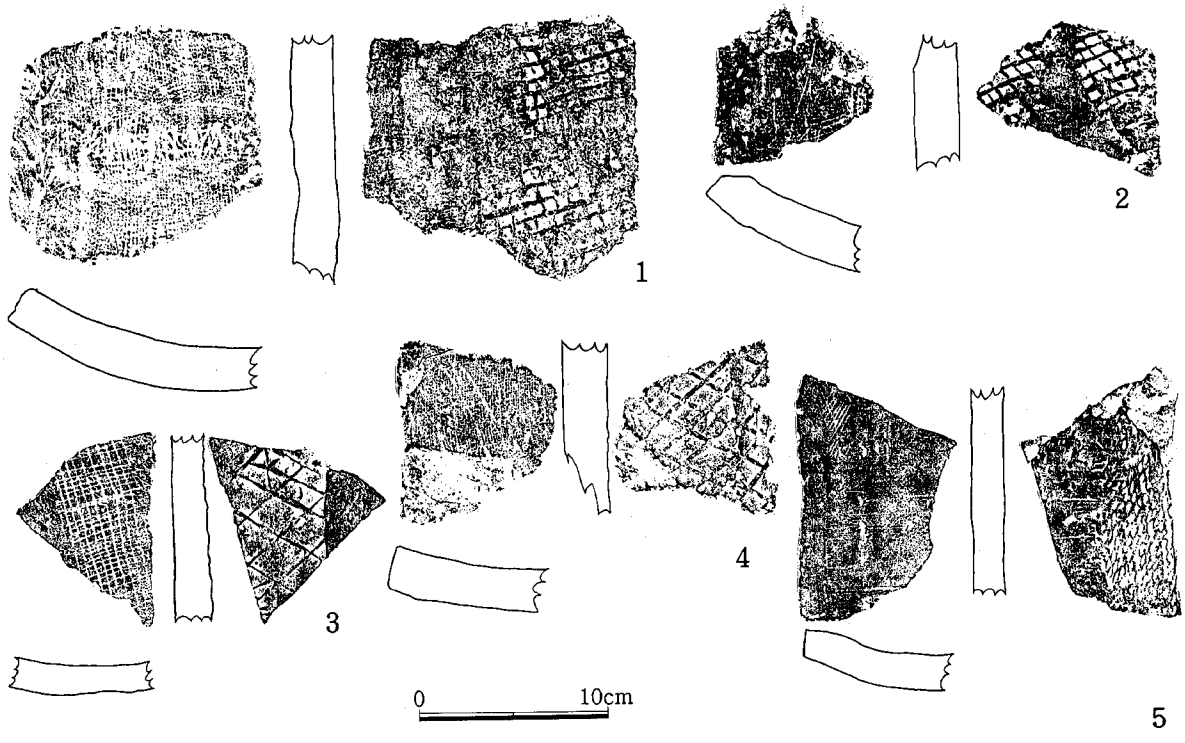


Fig.14　古代の遺物実測図Ⅳ（瓦）

ヘラ削りが加えられる。越州窯系青磁（Fig.12－21～26）は比較的多い。21・23～26は椀、21・24は内面に片切り彫りの花文がある。22は蓋、中央部に円孔が穿たれ、外面には片切り彫りと毛彫りによって花文文様を入れる。新羅陶器（Fig.13－1～13）は蓋、甕がある。1・2は口縁部、12は底部で平底である。外面は格子タタキ、内面には受具痕、横ナデ調整がみられる。製塩土器（Fig.13－14～24）円筒形をなす焼塩用の製塩土器で内面に布痕がつく。14・16・19は口縁部、15は底部破片である。瓦類（Fig.14）はタタキが格子目と縄目がある。量的にはコンテナー箱分である。

古代の遺物は量的に多く、越州窯・緑釉陶器・新羅陶器・瓦類・墨書土器等が存在し、有力である。本調査区周辺でも同様の遺物が多量に出土しているので、本地区も含めて官衙に相当する施設があったと推定される。

5．第3面検出遺構と出土遺物

(1)　SK－12　調査区中央部、南壁にかかる姿で検出した土坑である。SK－13に切られている。現在は長径1.7m、短1.15m、深さ90cm前後、平面プランは楕円形をなすとみられるが、南壁に延びる部分とSK－13に切られているため明らかにしがたい。

出土遺物はFig.15・Fig.16－1～8に示した。多量の中国産陶磁器と若干の国産土器が出土している。中国陶磁器はFig.15－19に示した四耳壷を除いて、他はすべて白磁器である。1は口縁に輪花の刻み入れ、刻みの下に劃線を入れ五輪花としている。2～6はやや高い高台を有し、体部

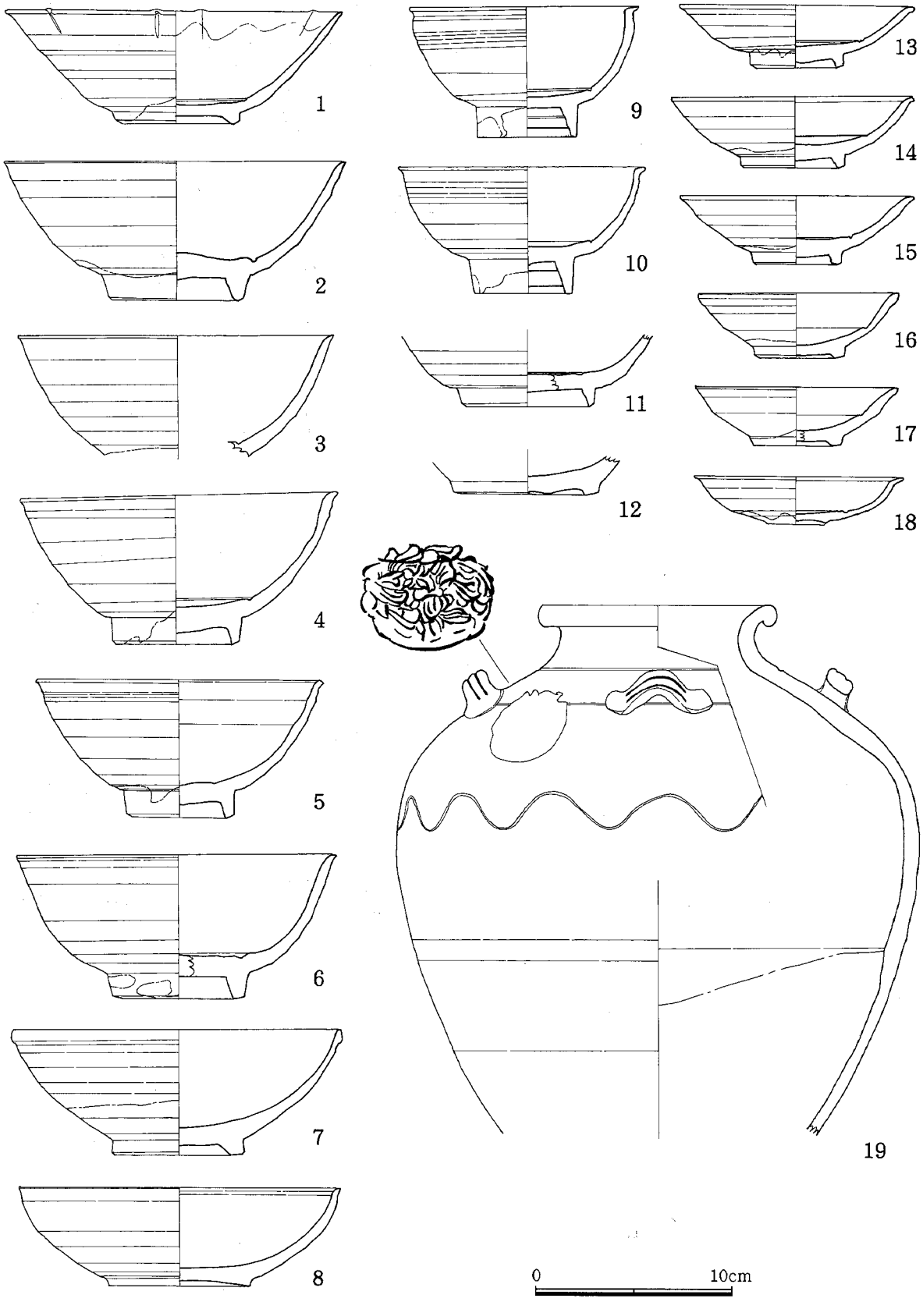


Fig.15　SK－12出土遺物実測図

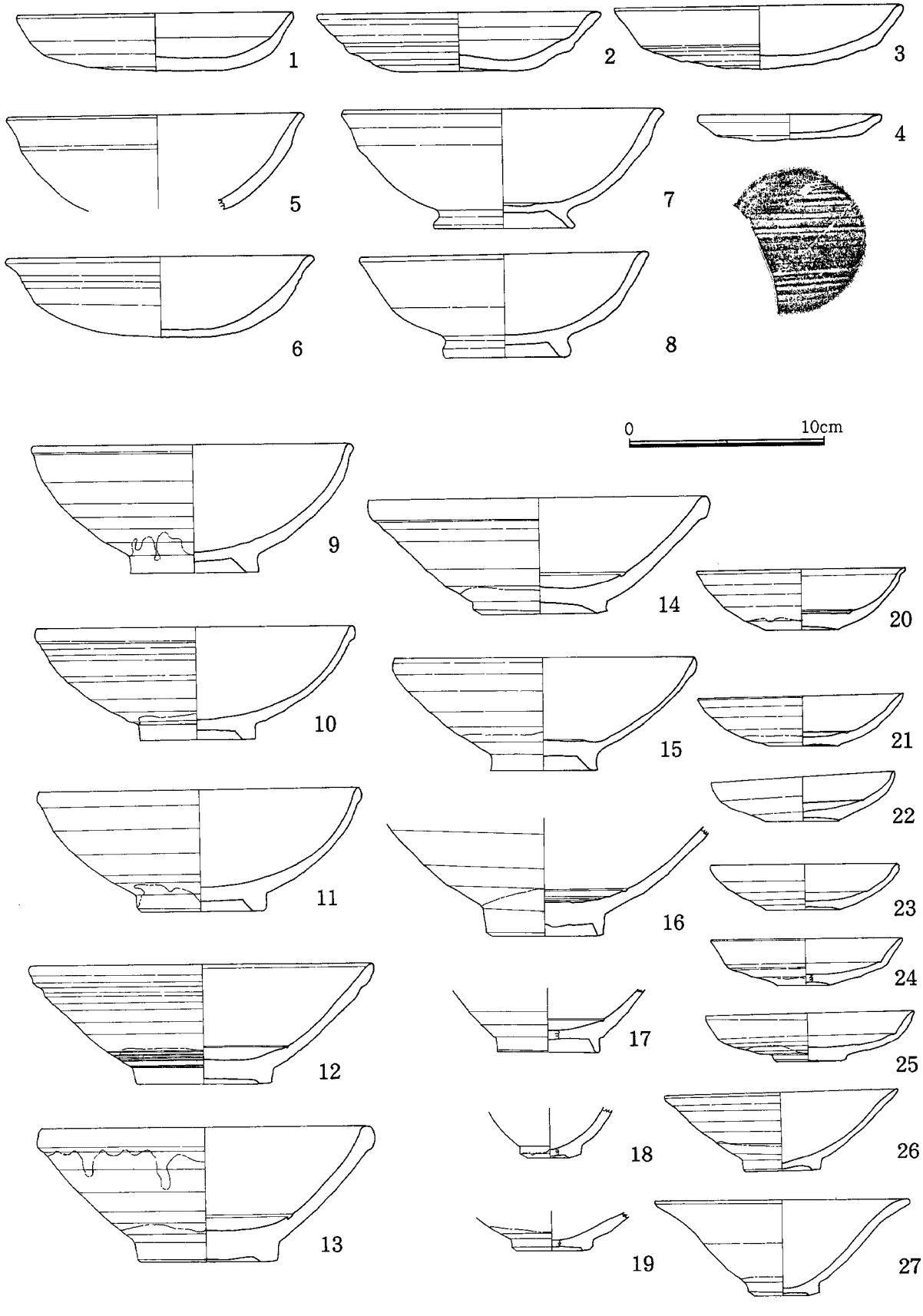


Fig.16　SK－12・SK－13出土遺物実測図

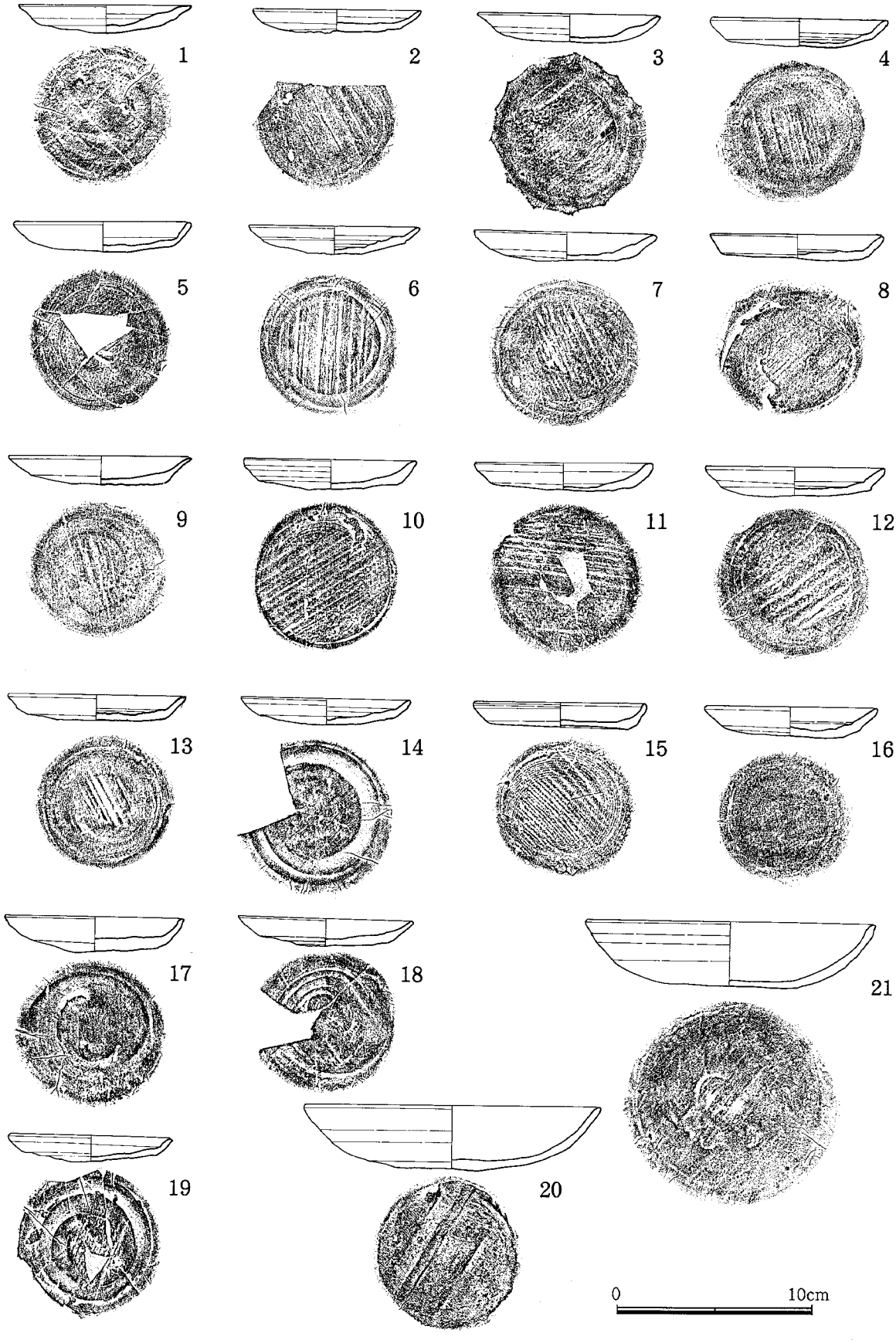


Fig.17　SK－13出土遺物実測図（土師器）

は丸味をもってたちあがり、口縁端部がわずかに外に引きのばされる。7は底部からゆるやかにたちあがり、口縁部は小さな玉縁となる。8は体部がやや低い。底部は高台付ではなく、あげ底状の平底である。9・10はやや小型の椀、高い高台の底部から体部は丸味をもってたちあがり、口縁端部は横に引きのばされる。見込に圏線1条をめぐらす。13～18は坏、13～15は高台付の底部から体部は外方に張り出し、口縁端部が外方に屈曲する。14・15は高台は低く、体部中位で屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。18はあげ底状の平底、口縁端部は屈曲し外方にのびる。19は全面に黄褐釉を施す。口縁部は丸く肥厚させる。頸部に沈線2条をめぐらし、横耳を等間に取りつけ、耳の間には貼花文をおく。胴最大径には沈線による波状文を施している。口縁上方に6個の目跡が残る。Fig.16－1～3は土師器坏、底部はヘラ切りである。4は小皿、底部に板目圧痕がつく。5～8は黒色土器、7・8にはバチ形に開く高台をつける。

(2) SK－13 SK－12のすぐ西に存在する土坑である。Fig.18－1に実測図を示した。南北径2.4m、東西径2mの不整楕円形の土坑掘り方内に東西径1.45m、南北径1.55mの方形土坑がある二重構造を示している。元来は内側の土坑に木枠があった可能性が強い。四隅の角には丸太がおかれたように径10cm前後の円形の張り出しがある。深さ60～80cm、底は平らで、口より広がり若干袋状をなす。底には炭化物が多く、完形品に近い白磁器、土師器が多量に出土した。(Fig.6－2)

出土遺物には白磁器・青磁器・天目・土師器、自然遺物として炭化米・炭化麦・その他の植物遺体と若干の魚骨があるが、これらの自然遺物は別稿にゆずる。

白磁器（Fig.16－9～15・20～25）は13個体を図示した。椀と皿の二種がある。9～11は高台付の底部から体部が外に張り出しながらたちあがり、口縁部は内傾気味になる。口縁は小さな玉縁になる。12～14は高台は低く体部は直線的にたちあがり、口縁は玉縁をなす。見込には圏線1条がめぐる。15は器形的には前者に似るが、口縁形態に若干の違いがある。玉縁はあまり肥厚せず、偏平である。20～25は小皿、20～24はあげ底状の平底をなす。20は口縁端部を外

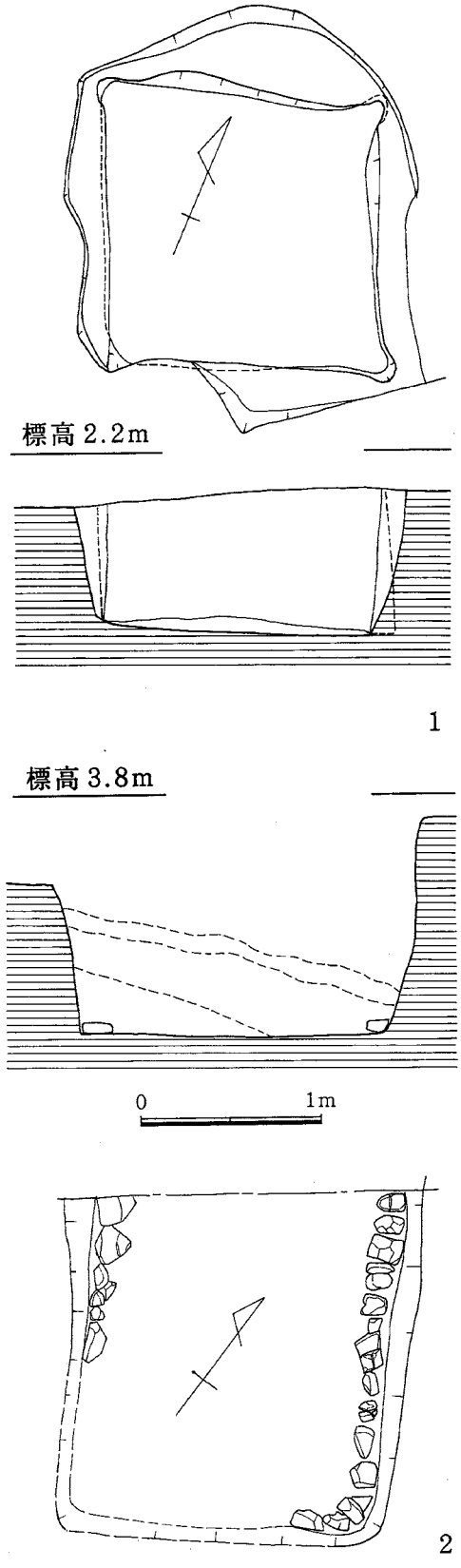


Fig.18 SK－13・14実測図

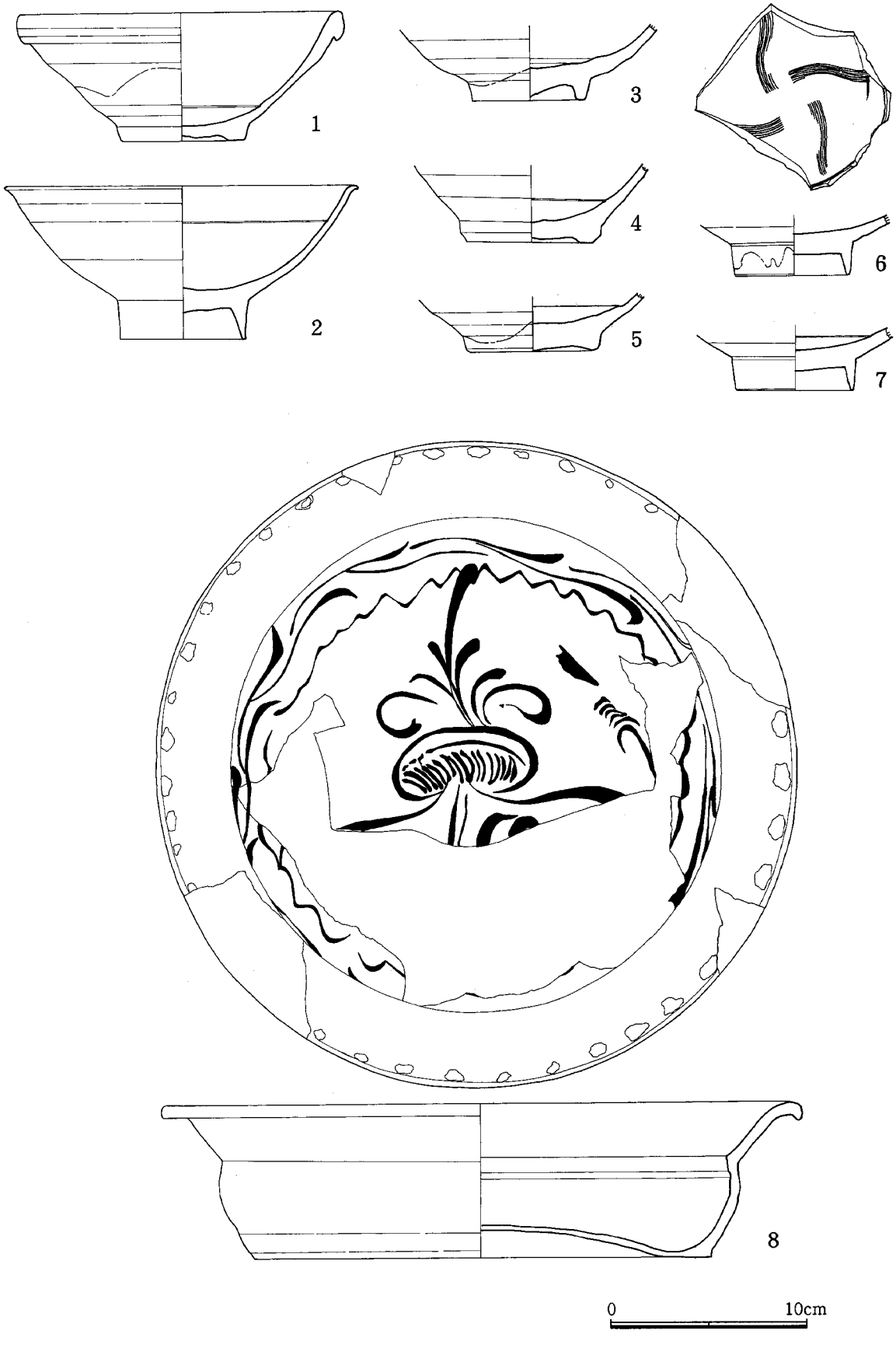


Fig.19　SK－15出土遺物実測図

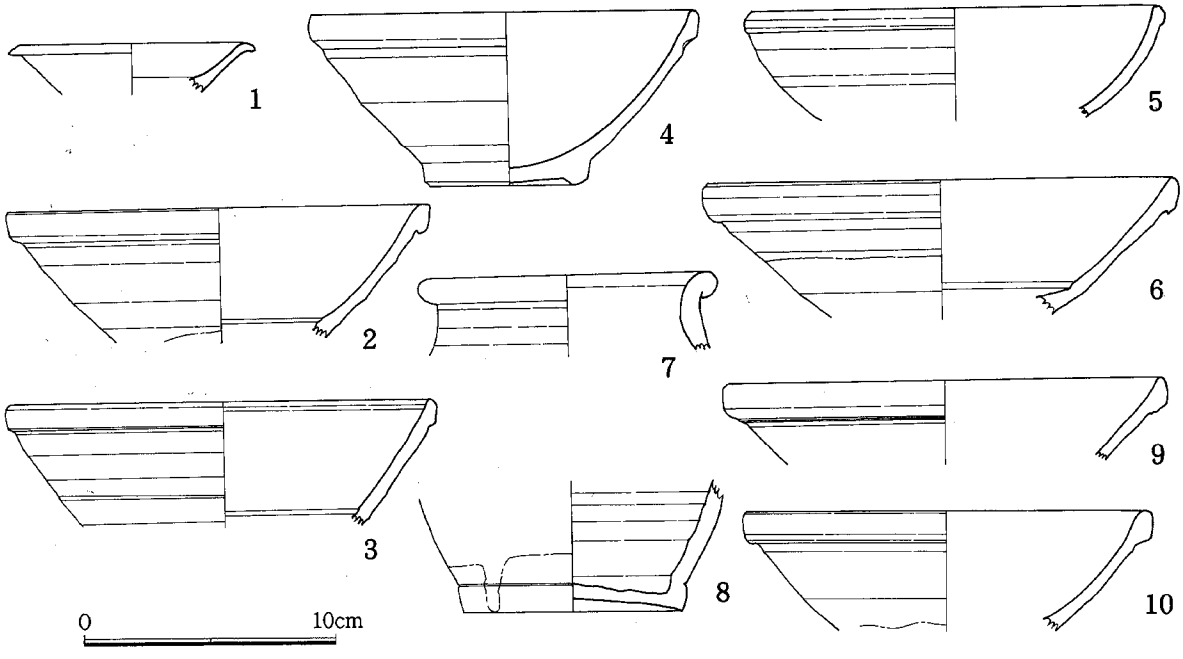


Fig.20　SK－16・SK－17出土遺物実測図

方へ引き出す。24～26は体部中位で屈曲し、口縁部は直線的にたちあがる。25は円盤貼り付け状の底部である。青磁器（Fig.16－16・17）いずれも底部破片。高台はやや高い。天目（Fig.16－18・19・26・27）18・19は底部破片。26・27はほぼ完形に近い。低い高台の底部から体部は直線的に外方にのび、口縁で大きく外反する。胎土は白色で良質である。土師器（Fig.17）は小皿（1～19）と坏（20・21）の二種があるが圧倒的に小皿が多い。底部はいずれもヘラ切りで、上に板目圧痕がつく。

(3)　SK－14　（Fig.18－2）SK－13の西、約40cm離れて存在する土坑である。一部は北壁の中に延びている。現存で東西径2.0m、南北径2.0m＋αで深さ1.2mを測る。掘り込み面は上方で時期的には中世末と考えられるが、埋土中から遺物の出土はない。壁に沿って角礫が並べられている。埋土は西方から一気に埋められている。状況からは墓壙と考えられるが確証はない。SK－19を切っている。

(4)　SK－15　SK－14の西方約1mにある土坑である。一部南壁にのびる。南北径1.6m＋α、東西径1.2mの楕円形プラン。深さ約30cm。遺物の出土状況はFig.6－3に示した。

出土遺物（Fig.19）には、白磁器、黄釉陶器、土師器があるが量的に少ない。1～7は白磁器、1・4・5は高台が低い。1は体部が直線的にのび、口縁は玉縁をなす。2・6・7は高台がせまくて高い。2は体部がゆるやかにたちあがり、口縁端部は外反する。内面の口縁下に細い沈線をめぐらす。6は見込みに櫛描きの文様を施す。8（裏表紙写真）は、黄釉鉄絵盤である。ほぼ完形に復原できた。底部はあげ底の平底。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は強く屈曲し外反する。口縁端部は下方にさがる。見込みに鉄釉で草花文が描かれる。

(5)　SK－16　SK－15の北側に検出した土坑である。大部分は北壁の中にのびる。東西径1.4m、南北径0.95m＋αの円形ないしは楕円形になるとみられる。深さ0.5m、壁面はほぼ垂直である。

出土遺物（Fig.20－1～5）には白磁器、土師器があるが、量的に少ない。5点を図示した。

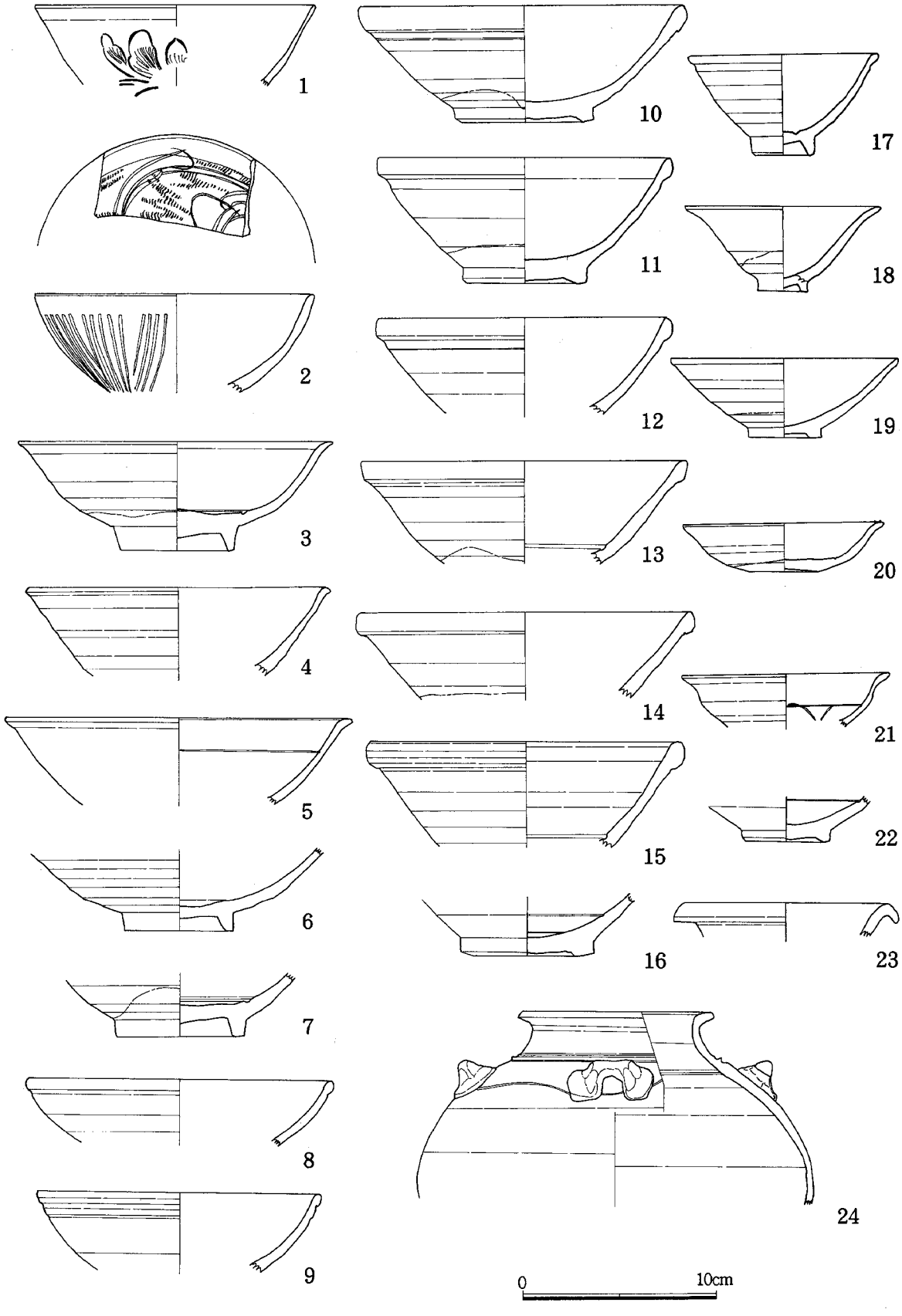


Fig.21　SK－18出土遺物実測図Ⅰ

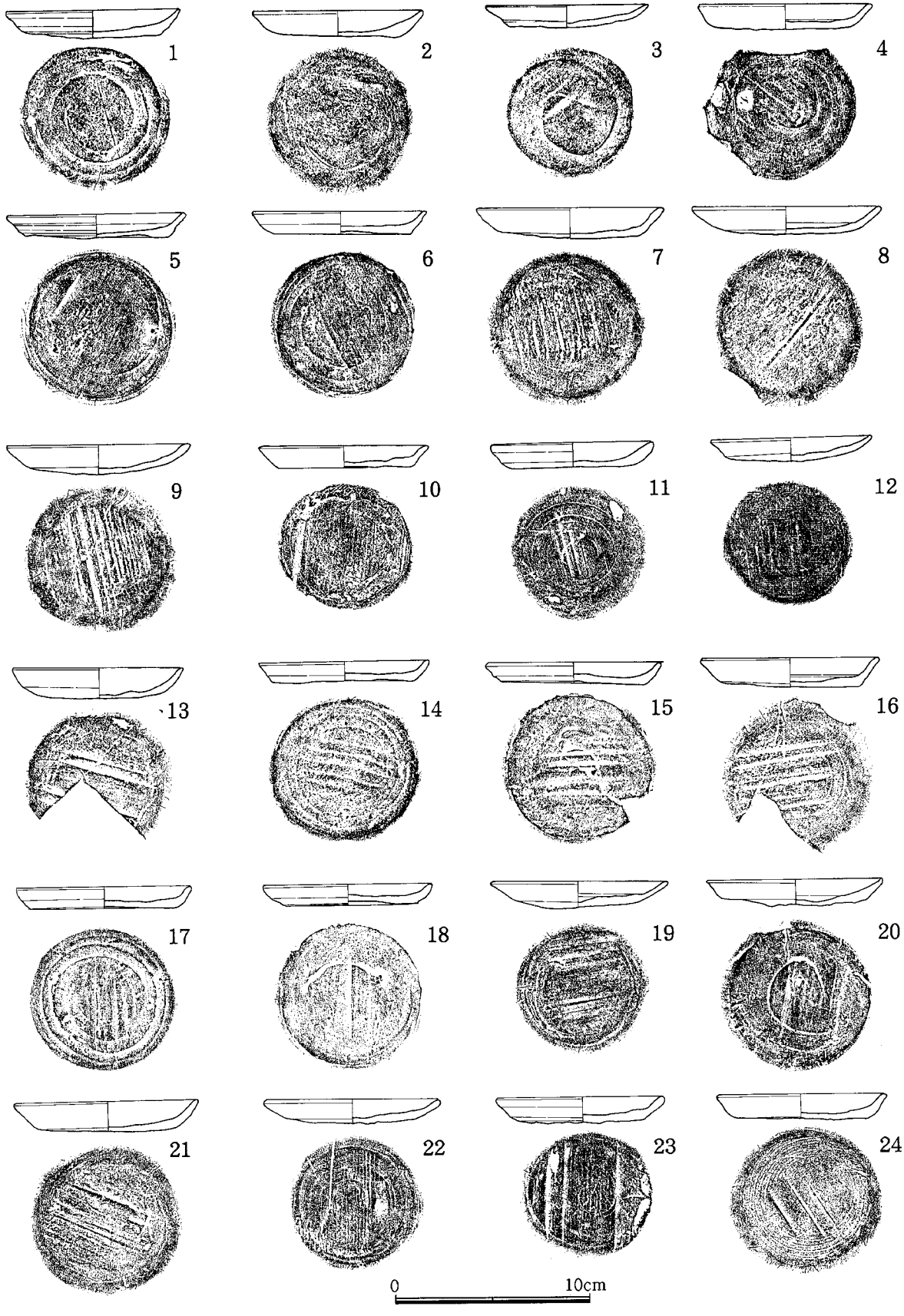


Fig.22　SK－18出土遺物実測図Ⅱ

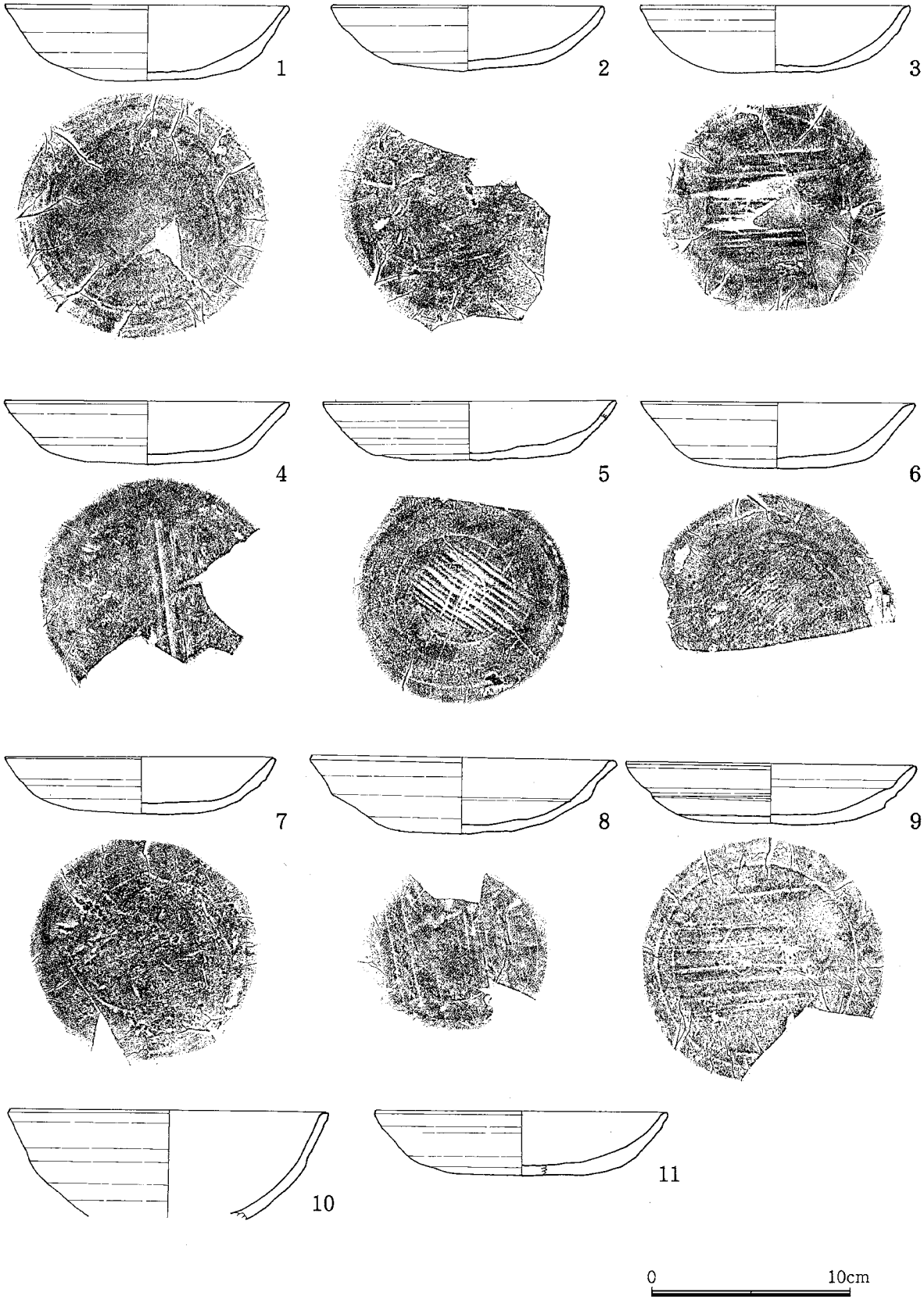


Fig.23　SK－18出土遺物実測図Ⅲ

いずれも白磁器である。1は小皿。体部は直線的にたちあがり、口縁端部が屈曲し下方にのびる。2〜4は同種の器形。低い高台の底部から体部はほぼ直線的にたちあがる。口縁は玉縁である。5は体部が丸味をもってたちあがり、口縁は小さい玉縁となる。

(6) SK－17 SK－15の南に検出した土坑、大部分は南壁の中にのびている。現状で東西径1.9m、南北径0.5m＋αの長方形ないしは方形プランになると考えられる。深さ1〜1.2mでやや深めである。埋土中より、白磁器、褐釉陶器、土師器が出土したが量的には少ない。

出土遺物（Fig.20－7〜10）は4点を図示した。壺（7・8）と白磁器（9・10）である。7は口縁部破片、口縁部は外に強くかえり肥厚し丸くなる。8は底部。あげ底状の平底である。9・10は体部が直線にたちあがり、口縁は玉縁をなす。

(7) SK－18 SK－15の西に約1m離れて検出した土坑である。古代の溝を切っている。層位的にはSK－17より新しい。東西径2.2m、南北径1.4m＋αで、約半分は南壁の中にのびている。平面プランは円形ないしは楕円形をなすと考えられる。深さは約1.1m。埋土中からの出土遺物は多いが、大部分は破片である。

出土遺物（Fig.21〜23）には青磁器・白磁器・土師器・鉄製品・石製品がある。中国陶磁器の占める割合は高い。Fig.21－1・2は青磁器、1は越州窯系青磁の椀、外面に花文を片切彫と毛彫で描く。2は同安窯系青磁、内外面に櫛描きで草花文を入れている。3〜23は白磁器、3は高台がやや高く、口縁端部が外方に引きのばされる。椀はやや浅い。4・5も口縁端がわずかに外反する。5は内面の口縁下に圏線1条をめぐらす。6・7は底部破片。8・9は体部が丸味をもってたちあがり、口縁は小さな玉縁をなす。10〜16は、低い高台の底部から、体部がほぼ直線的にたちあがり、口縁は玉縁をなす。玉縁の形態は個々において若干の差がある。13・14〜16は見込みに圏線1条がある。17〜19は小型の椀である。17はやや高い高台を有し、体部はやや丸味をもって直線的に立ちあがり、口縁端部はわずかに外反する。18は口縁部が大きく外側に開く。19は低い安定した高台で、体部は外傾しながら直線的にたちあがる。20・21は小皿、20はあげ底状の平底、口縁部は外反する。21は体部中位でわずかに屈曲し、口縁部は外反する。内面の体部中位に圏線1条があり、その下方に細沈線で花文を描く。22は15の小型品。23は壺口縁部。口縁は上方で大きく

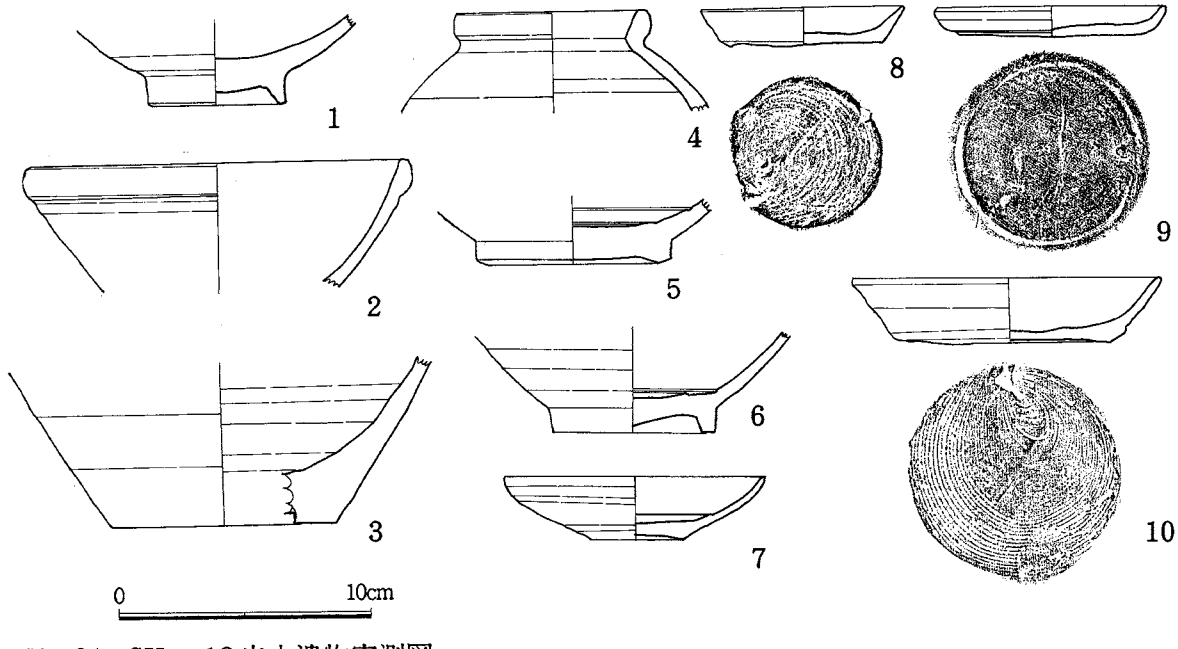


Fig.24 SK－19出土遺物実測図

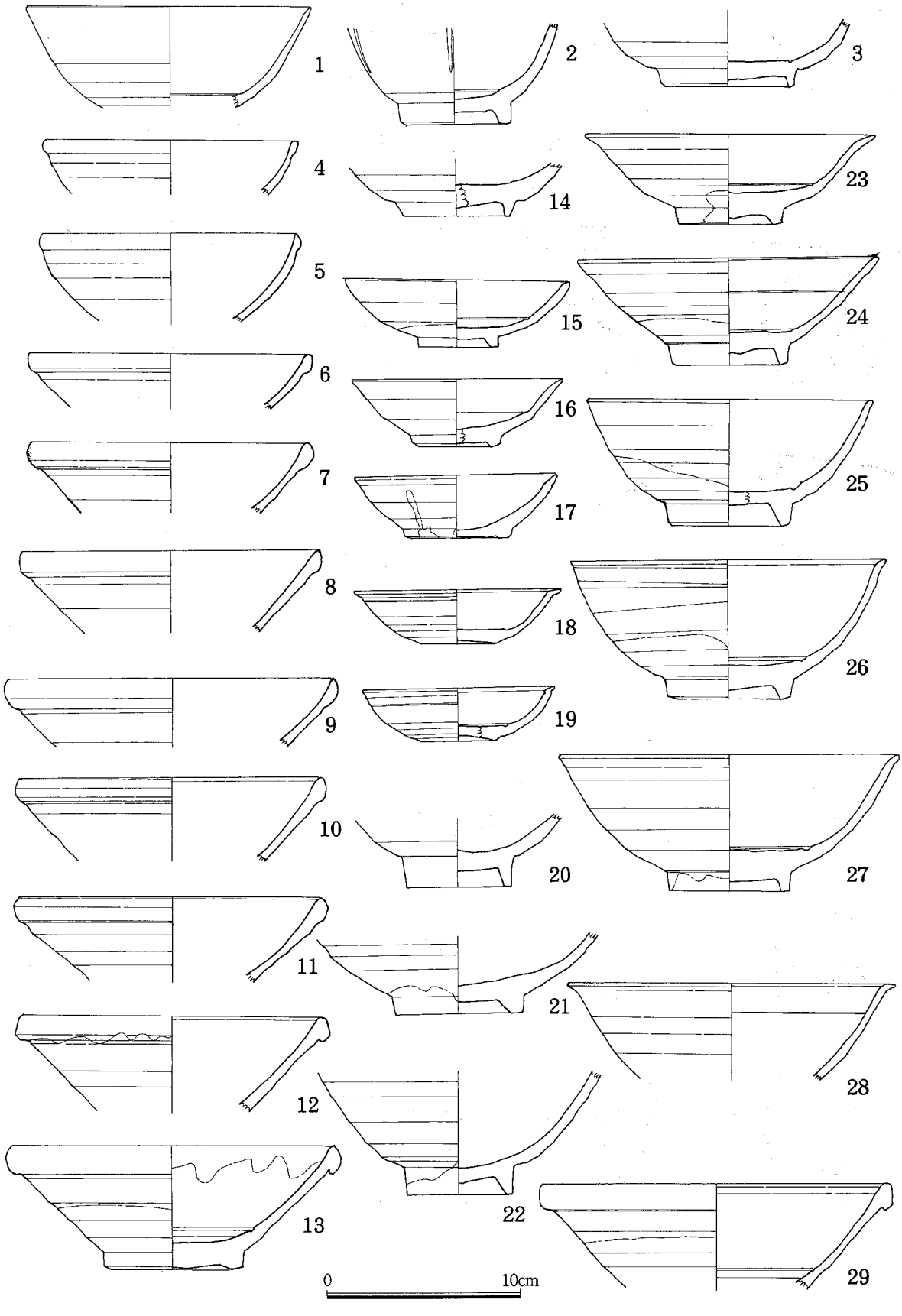


Fig.25　遺構外出土遺物実測図Ⅰ

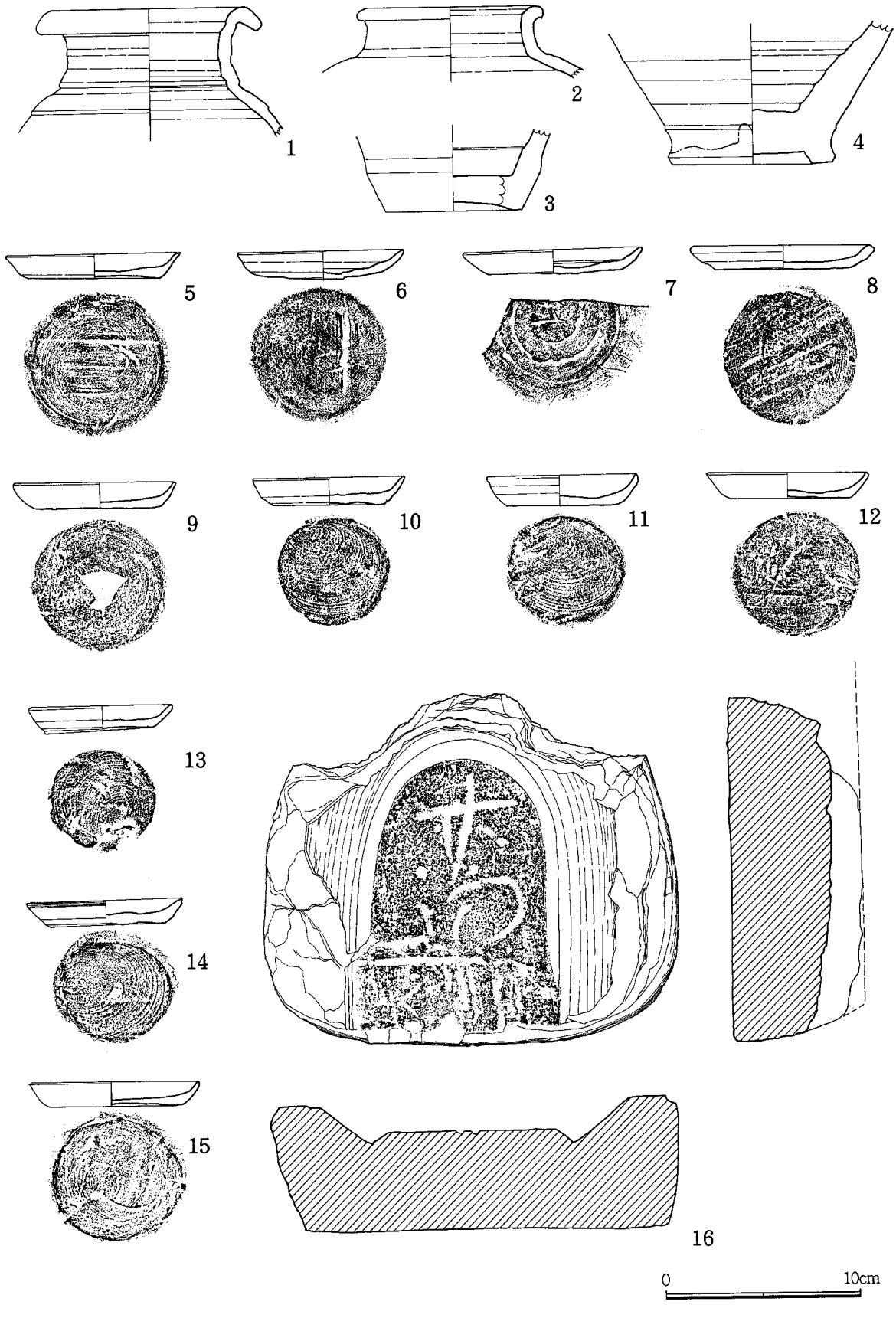


Fig.26　遺構外出土遺物実測図Ⅱ

屈曲し、口縁端部は下方にのびる。24は褐釉の四耳壺、口縁部は外反し、頸部と胴部の境に沈線2条をめぐらす。肩部四ヶ所に横耳を貼り付ける。横耳の間には、ゆるやかな波状沈線1条をめぐらしている。土師器（Fig.22・23）には小皿（Fig.22）と坏（Fig.23）がある。共に底部はヘラ切りで、その上に板目圧痕がついている。小皿は器形、口径に大差ない。坏には8・9のように体部中位に段のつくものがある。

(8) SK－19　SK－14の床面下に確認した土坑で、SK－16に切られている。方形ないしは長方形プランをなすとみられるが、切り合い関係や大部分が北壁にはいるため明らかにできない。残存状態が悪く、深さ約30cmを残すのみである。

出土遺物（Fig.24）は極めて少なく、いずれも小破片である。1・2・5～7は白磁器。2は玉縁口縁、5・6は底部で見込みに圏線1条がある。7は小皿、あげ底状の平底。8～10は土師器。8・10は糸切り底。SK－14の遺物が混入した可能性もある。

6．その他の出土遺物

遺構外の出土遺物をFig.25・26に示した。青磁器・白磁器・施釉陶器・土師器・鋳型がある。鋳型を除いて3面出土の遺物であるが、共に上層からの遺構の遺物が混入した可能性も否定できない。遺物の主体は各遺構出土遺物同様に主体を占めるのは、白磁器と土師器である。Fig.25－1～3は青磁、4～29は白磁である。2は輪花になるとみられ、劃線が残る。4・5は体部が丸味をもってたちあがり、口縁は小さな玉縁である。6～13・29は、低い高台から体部が直線的にのび、玉縁口縁をなす。15～19は皿ないし小型の坏。15～17は内面に圏線1条をめぐらす。18・19はあげ底状の平底で、口縁端部は外反する。14・20～22は底部破片。23は口縁が外側にひらく。24は体部が直線的にたちあがり、内面の口縁下に圏線がある。25は体部は丸味をもってたちあがる。26～28は口縁端部がわずかに外反する。Fig.26－1・2は壺口縁部。1は口縁で屈曲し、下方にのびる。2は口縁がわずかに外反する。3・4は壺底部。4には高台がつく。5～15は土師器小皿。5～7はヘラ切りで、5・6には板目圧痕がつく。8～15は糸切り底である。16は鋳型、製品は明らかでない。後刻の文字があり、廿四か。時期的には中世末～近世のものと思われる。

第3章　お　わ　り　に

本調査区は対象面積が約137㎡とせまく、また、連日の雨天続き、調査期間の限定と悪条件が重なったが、その成果は注目される。特に11世紀後半から12世紀前半にかけての各土坑出土の中国産陶磁器と土師器のセット関係が把握できたことは重要である。遺構の活発な形成の開始が、この時期に始まることは、袖の湊との関連で注意されるところである。これら土坑に伴う自然遺物の分析は先におくったが、その種類、組み合せは当時の食生活を知る上、あるいは、交易物資の一端を知る上では欠かせないことである。特に今回検出した古代の水銀は、交易品としても文献上にしばしば登場する。今後の充分な検討が必要となろう。

また、古代の遺跡では、遺構こそ溝3条を確認したにすぎないが、出土遺物の多さやその内容を考えると、この周辺に官衙施設の存在を予想させる。博多部におかれた施設にどのようなものがあったかは、文献的に未だ未解決であるが、今後、この方面の検討も必要であろう。現在、博多部にあった官衙施設として、鴻臚中島館や津厨を想定することができるが、今後、このような施設と考古資料がどのような形で組み合うのかも興味ある問題である。本報告では紙数の関係もあり、莫大な遺物量の一部を報告したにすぎない。今後、機会をみつけて、その欠を補いたいと思う。

博多四三

福岡市埋蔵文化財調査報告書三九二集

一九九五年

福岡市教育委員会

博多43－博多遺跡群第81次発掘調査報告書　1995年　3月31日発行　発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印刷　㈱トータルプリンティング博多
福岡市南区大楠2-21-1